東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

幼兒の教育

主幹 倉橋惣三

第三十二卷 第七號

文學博士　田中義成先生著

國史の虎影

□四六判
□洋　裝　金貳圓參拾錢　送料拾貳錢

新刊

田中義成博士は、我が國史大家として造詣最も深き事は治く人の知る處也。本書は南北朝時代より近世時代に至る迄、紛糾せる史實を斯學研究家の爲め、流麗なる文章を以て記述されたる一大雄篇にして、主要なる項目を擧ぐれば、(一)倭冠と李成桂　(二)悲絶壯絶なる元冠の役　(三)關八州を風靡せる北條早雲　(四)桶狹間の戰　(五)太田道灌の木像　(六)通法寺の源氏の墳墓　(七)賀名生皇居の址　(八)伏見と桃山と國史教授家は勿論一般家庭の讀物としても絶好なりと信ず。

發兌　東京日本橋人形町　東盛堂

振替貯金東京七五〇六番
電話濱町貳壹四四番

理學博士 山口鋭之助先生
文學博士 藤岡勝二先生 監修

教文書院編輯部編纂

カーレント學生參考書

現代學生知識の泉源!!
豫習復習受驗の要書!!

學生の良師となれ
簡にして要を盡せ
確實にして權威あれ
學習に興味あらしめよ

これが本書編纂のモットーである。

近時諸種の學生參考書が續々と出版されるが、不備不正確なものが多く、學生諸君をして其選擇に迷はしめるは吾人の最も遺憾とする所である。吾がカーレント參考書は特に是等の點に着眼して前條のモットーに基き、理學博士山口鋭之助、文學博士藤岡勝二兩先生監修の下に、各々專門家之を分擔し鋭意完成したる模範的良參考書にして、豫習、復習、受驗に必要缺くべからざるものである。

日本地理	上下二冊
外國地理	上下二冊
化學	上下二冊
物理學	上下二冊
幾何學	上下二冊
代數	上下二冊
日本史	上下二冊
西洋史	上下二冊
東洋史	一冊
國史解釋	一冊
英文法	一冊
地理概論	一冊
動物學	一冊
植物學	一冊
鑛物學	一冊
生理衛生	一冊

最新價料各冊金四錢
ボイントケ活字五錢
ボトツ採用型錢

發行所 東京上野公園寛永寺坂下上根岸八十八番地 教文書院 (振替東京四六壹壹壹番 電話下谷三〇四七番)

日本幼稚園協會編輯幼兒の教育

會長　東京女子高等師範學校校長　茨木清次郎

主幹　東京女子高等師範學校教授　倉橋惣三

賛助員（五十音順）

東京女子高等師範學校教授	巖谷季雄
東京帝國大學醫科大學講師　醫學博士	太田孝之
東京高等師範學校教授　文學博士	大瀨甚太郎
慶應大學教授　醫學博士	唐澤光德
東洋幼稚園長	岸邊福雄
早蕨幼稚園長	久留島武彥
帝國教育會會長　文學博士	澤柳政太郎
東京市學務課長兼東京市視學長	佐々木吉三郎
東京高等師範學校附屬小學校主事	佐々木秀一
東京女子高等師範學校教授　文學博士	下田次郎
東京女子高等師範學校教授　文學士　醫學博士　文學博士	菅原敎造
東京女子高等師範學校主事	富士川游
東京女子高等師範學校附屬高等女學校主事	藤井利譽
東京女子高等師範學校講師	藤五代策
大阪市教育部長　文學博士	福士末之助
	谷本富
帝國教育博物館長	棚橋源太郎
內務省社會局部長	田子一民
東洋大學教授	高島平三郎
東京女子高等師範學校囑託	土川五郎
帝國教育會理事	野口援太郎
文部省社會教育課長	乘杉嘉壽
京都帝國大學教授　文學博士	野上俊夫
東京女子高等師範學校附屬幼稚園保	坂內みつ
醫學博士	弘田長
東京女子高等師範學校校長	堀七藏
文學博士	松村武雄
東京帝國大學教授　文學博士	松本亦太郎
奈良女子高等師範學校長	槇山榮次
醫學博士	田谷啓
奈良女子高等師範學校附屬幼稚園主事	森川正雄
東京高等學校長	湯原元一
東京帝國大學教授　文學博士	吉田熊次

第二十三卷　幼兒の教育　第七號

目次

本誌の擴張に就て　會長　茨木清次郎……二

プロジェクト法と幼稚園の作業　東京高等師範學校教授　乙竹岩造……四

教育問答（一）　主幹　倉橋惣三……七

子どもの惡癖と僻み　天野誠齋……一四

初夏の幼兒の保健に就て　東京帝國大學講師醫學博士　太田孝之……二〇

夏の自然（季節の科學）　東京女子高等師範學校教諭　堀七藏……二四

童話　可愛らしい光姫（ヒカルヒメ）たち　よしを……二八

兒童藝術と彫塑展覽會　曠原社　朝隆其明……三二

私の子供の繪　東京女子高等師範學校助教授　山形寛……三六

石鹸玉（シャボンダマ）遊びの玩具いろ〳〵　東京女子高等師範學校講師　藤五代策……四五

童話　かけくち　萬國幼稚園協會　茂木由于　萩原英一　作歌　作曲……四八

萬國幼稚園協會案幼稚園要目（續き）　本誌記者……五〇

英國其他諸國に於ける保育學校の近況　本誌記者……五七

長編お話　春　東京女子高等師範學校教授　岡田美津……六〇

雜報　本誌記者……七四

日本幼稚園協會會員名簿……七五

天野誠齋先生著

乳兒の育て方 一編
幼兒の扱い方 二編
兒童のしつけ方 三編

羽二重表紙新型箱入美本
正價各金貳圓
送料各拾貳錢

生後から三歳迄
七月五日發行

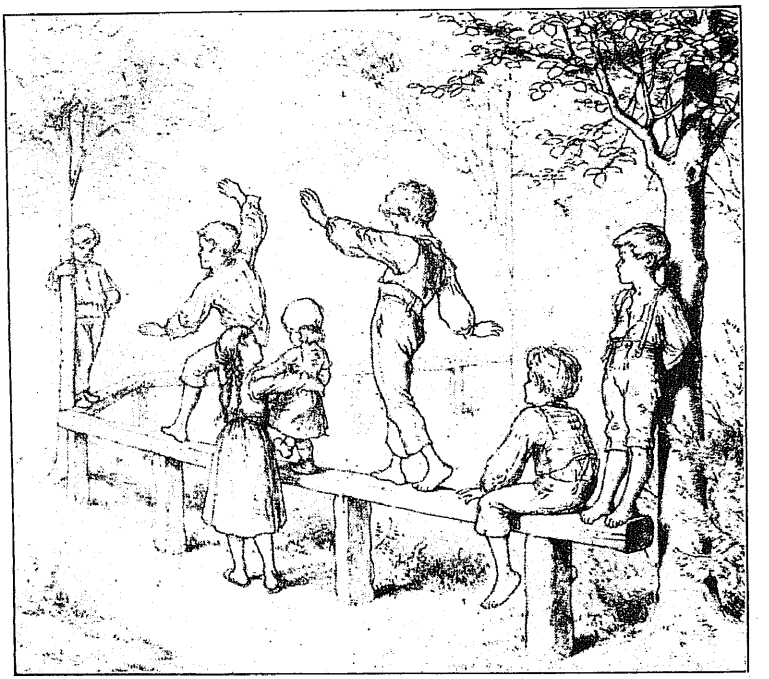
四歳から小學二年迄
八月十日發行

小學二年から六年迄
九月一日發行

實驗から出た著者三十年苦心の育兒叢書

我國の婦人は、子供の病氣と治療に對する手當の知識が薄いために、子供の死亡率が世界各國中で日本が一番多いと云はれてます。是れは大部分が母親や諸姉が斯道の知識に乏しいのが最大の原因です。著者は育兒專門家として、我醫學界に又婦人界にも御馴染の愛兒教養に對する實地の研究家で、最近の嚴ましい育兒問題に對して、三十年の實驗を悉く發表したら、母への指針として絶好のものであります。

發行所 東京上野公園 寛永寺坂下 教文書院 電話下谷三〇四七番 振替東京四六一一一番



アルベルト・ヘンチエル筆

アルベルト・ヘンチエルは獨逸の畫家である。其の作は、兒童生活に對する驚くべき深い興味を示して居る。殊に、子どもの子どもらしい眞面目さ、平凡生活の底に充つる子どもの心の眞劍さに就て、獨特の深い理解がある。（倉橋生）

日本幼稚園協會（幼兒の教育）擴張披露の集ひ

東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

幼兒の教育

主幹
倉橋惣三

第二十三卷　1923　第七號

本誌の擴張に際して

會長　茨木清次郎

幼兒教育の重要なることは、更めて說く必要もない。たゞ餘りに必要のことなるが故に、却つて必要なる所以の意識せられざる趣きあり、また、餘りに普通なるが故に、特に其の研究の、他の教育に比して、時に怠らるゝ觀なきを免れない。しかも、幼兒の教育は、其の問題頗る多岐に涉り、其の方法も亦意を用ゆれば用ゆる程、容易のことにあらざるを發見するのである。

幼兒期教育は、一般の兒童教育の中にも、殊に家庭を中心とすること、之れ亦言を俟たない。幼兒教育の第一の責務は親にありとすべきである。しかしながら、之れに對して協同的位置にある幼稚園、之れに對して補助的位置にある社會的幼兒保育機關の併せて必要なることも、多くの論を要しないのである。なかにも、幼稚園は、幼兒教育の機關として、特に研究せられて居る點が多いのであつて、此の問題の研究的中心とも言ふべき位置にある。其の執るところの主義方法に於て、變遷もあり異說もあるが、それだけに、研究的に、多くの注意を拂ふべき必要がある。

更に近來の傾向としては、幼兒教育の範圍を年齡的に延長して、小學校幼學年の問題を、その中に包含せしめて來た。端的にいへば、幼兒の問題を學齡前に限ることなくして、學齡中の初めの部分は、之れを幼稚園と聯結して、幼兒期の同一特質の中にありとするのである。米國に於て之れが特に著しい。

社會的幼兒保育機關も、嘗ては、一般教育とは切り離されたる特殊的問題として考へられて居たが、今日の趨勢として

は、次第に國民教育系統に近接し來りつゝある。即ち、義務教育中には入らざるまでも、國民の一般生活中の問題とせらるゝ傾向にある。英國の新らしき保育學校令は、之れを示すものである。

英米の例、必ずしも倣ふべしとせぬが、幼兒教育の重要視せられ來りしことは、蓋し、近代の顯著なる現象たるを免れない。又敢て、幼稚園、幼學年、社會的幼兒保育の問題とせず、家庭に於ける幼兒生活の問題としても、玩具、繪本、童話、童謠、其の他に就て、最も旺盛なる研究が促され、最も急速なる普及が行はれ來つたことは、我國眼前の事實として、何人も見のがし得ないことである。實に、幼兒教育に關する廣汎なる諸問題は、すべて、現代に於て、最も眞面目なる興味の中心に置かれて居ると言ふべきである。

我が日本幼稚園協會は、その長き歷史を以てして、常に斯の問題のために專心し來り、之れに關與せられたる先覺諸君の力によつて、斯學のために貢獻せること尠しとしないのであるが、今日の大勢は、更に本會の任務に關して、一倍の努力を必要とするところがある。茲に、其の一端として、本誌に多少の擴張を加へ、從來の稍々狹き機關雜誌の體裁より、聊か社會的活動に進まんとしたのである。

たゞ、本會の獨力、よく世の期待に應ずるの容易ならざるを思ふのであるが、幸に、長く本會に同情ある多數の學者、實際家諸君の後援と、新たに發行人として其の衝に當ることゝなつた敎文書院越元君の協力とによつて、會としては最善の努力を盡すことゝなつて居る。舊き會員諸君の變らざる同情と、新らしき讀者諸君の厚き好意とによつて、本誌をして、その在るところの所以を完ふし得んことは、本會のために、また、我國敎育界のために、切に希望するところである。

プロジエクト法と幼稚園の作業

東京高等師範學校教授　乙竹岩造

近年米國の教育界に盛んに唱導され、且つ實行されて、我が邦にも傳へられ、又倣はれて來たものゝ一は、プロジエクト法である。プロジエクト法は、或は計畫法、或は構考法など樣々に譯されてゐるが、こにかく、教材即ち題材を、一つの計畫又は構案の形で取扱はせようといふものである。社會の實際生活に於て、事業を劃策し經營することを企業と呼ぶが、丁度一つの企業のやうに、計畫構案の姿で學習させようといふのが、その趣意である。その論據はプラグマティズムといふよりは今一つ奥のビヘービオリズムに發してゐるので、これ等の點に入つて議論をすれば、すべき點も無いではないが、とにかく、一方には、本能や衝動や慾望や理性やを內容とする子供の世界を篤と見届け、他方には道德や知識や藝術を內容とする實際の世界を確乎と眺め、そしてその兩方の間に、生きた關係を、覘ひ外づさず付けやうとするのが、この考の、言はゞ山こもいふべき所であつて、この點に於ては、確かに一つの進んだ面白い着眼であると言はねばならない。

幼稚園は保育の場所であつて、規則立つた教授を施し學習をさせる所では決して無い。そこに行はれる作業の如きも、學校に行はれる作業とは違つてゐて、元來遊戲的の作業でなければならない。一體遊戲と作業とはどう違ふか。これは言ふまでもなく、遊戲はそのものゝ中に目的を有つてゐるものであるし、作業は或目的の爲に努力する活動である。即ち、遊戲の爲に遊戲をするのが、遊戲の遊戲たる所以であるし、或る目的を覘ひ外づさず作業するのが、作業の作業たる所以であるから、この點に於ては、遊戲と作業とは明らかなけじめを有つてゐる。丁度と朱と紫とは確かに違ふやうなもので

ある。然らば遊戯と作業とは、何等のゆかりも無いまるで違つた世界であるかといふと、必ずしもさうでは無い。のみならず却つて、作業は遊戯から進んで來るものであつて、遊戯は實に作業の苗床であり、基礎である。恰かも紫の中には朱を含んでゐるのと同じである。殊に子供にあつては、この遊戯から作業への移り行きが、極めて大事なことであり、保育上に於てはこの移り行きの點こそ愼重な、そして巧妙な考慮を加へられなければならない問題である。何となれば、幼稚園時代の幼兒は、方にこの稚し移りの時期に活きてゐるものであるから。

乃ち、幼稚園の作業は、作業といつても寧ろ遊戯的の作業であらねばならない。けれども、唯だ手當たり放題に子供を活動させようとしても、させられるものでは無く、又子供も活動するものでは無いから、どうしてもそこに、何等かの材料を供給し、對象を與へなければならない。即ち或る纏まつた形に於ての作業の必要が、茲に生ずる。然かし纏まつた形に於ての作業も、唯だ材料を供給し、對象を與へるといふだけでは、動もすると、斑切型になつて興味を失つてしまつたり、單調な模倣的反復に馳せ行き詰まつてしまつたりするのが、多くの場合殆んど避くべからざる成行である。この點に就て、この計畫構案の考を取り入れるといふことが、確かに一つの面白い着眼ではあるまいかと考へる。即ち遊戯にせよ、作業にせよ、これを演じこれを行ふ子供のその態度の上に、自らこれを計畫し、自らこれを構案し、自ら工夫し自ら處理し、自ら解決を遂げては更らに又新らしく自ら計畫するといふことを、十分に涵養することが、一つのよい着眼ではあるまいか。そしてそれは、幼稚園には至極ふさはしいことではあるまいかと考へられる。

この考を取り入れることは、種々の點に於て幼稚園の生活に一段の活氣を帶ばしめるであらう。先づ第一に、子供が作業に對して自我を動かせる餘地が非常に多くなる。といふのは、工夫を凝らし計畫を立てるのであるから、全我を擧げてこれに沒頭するからである。第二には、子供の作業に對する持續性を伸長する。といふのは、自然と斷片的ではなくして繼續的に、無論時を隔てゝも亦た繼續的にそれに從事することになるからである。第三には、子供の作業に對する興味を

一層大ならしめる。といふのは、この方法では、その手續と範圍とが多種多樣であつて、言はゞ、無限にも展開せられるであらうから、例へば子供の興味の湧き出る泉が廣くなつたやうなもので、恐らく混々として流れて盡きぬであらう。然し、最も大事なことは、この方法によつて、かのそれ自身を目的とする所の遊戯の本質と、それから目的を覘ひ外づさず追求する所の作業の要諦とが、この態度の中に於ては、知らず識らずの間に、おのづから混和せられ、おのづから融合せられて、そして所謂遊戯から作業へのその大事な移り行きを、玆に完うさせる基礎を築くといふの一點である。

プロジエクト法は、學習を導いて有効ならしめる爲に案出された一つの方法であつて、保育の爲に考へられたもので無いのは言ふまでも無い。又幼稚園が、規則立つた學習の場所でないことも明らかである。唯だ、その作業の方面に於て、この法の趣旨を取ることは有益なことであらうと思はれる所から、玆にこれを一言したのである。

バツド・ボーイ

十番目の劇のとき不幸なことが持上つて、僕の俳優の生涯が、これでおしまひになりそうだつた。それは僕達は其時瑞西の英雄ウイリヤム・テルの劇をやつてゐたのである。勿論僕がテルになつてさ。實はフレッドが：そうこの役に當りたがつてゐたのだが、僕がそれをさせなかつたもんだから、やつこさん、おこつて、たつた一つの弓と矢を持つて、仲間からのけてしまつた。仕方なく僕は鯨鬚の片で石弓を拵らへたが、それでともかくフレッドゐなくとも事足りた。

オーストラリヤの暴君ジエスラーがテルに嚴命して、テルの息子の頭においた林檎を射落させる。いゝ所だ。ビーパーは子役と女形をみんな引うけてゐたが、今度はテルの息子になつた。間違の用意にボール紙をビーパーの上額にあてて、ハンカチで結んだ。そして用ゐる矢先もフランネルの小片でくるんでおいた。僕は上手な射手である。そして大きなりんこが、ほんの六尺の距離に、僕の方を向いて、赤い頬べたを美しくすゐた。僕は可愛そうな小ちやいビーパーを見た。ビーパーは、ためらはず、僕にこの偉業を果させるために神妙に待ちもうけてゐるのであつた。僕は集つた觀客が息を凝して靜り返つてゐるのを横に石弓をとり上げた。……觀客はケチイばあやをのけて男の兒が七人、女の兒が三人である。ケチーばあやは、縫針が入場料の代りをしない事はないといつて激論したのであつた。……繰返していふが、僕は石矢をとり上げた。

「ブーン」鞭縄の弦が手を　れた。だが、あはれ、矢は林檎に當らないで、ビーパーのあいた口の中へ眞當に飛込んでしまつた。それはビーパーがたま〳〵欠呻をしやうとして、そして僕の的を外したのである。

教育問答（一）

主幹　倉橋惣三

幼稚園の必要

客　幼稚園は必要だといふ説もあり、必要でないといふ説もあり、時とすると、有害だといふ樣なことを聞くこともあります。どんなものでせうね。

主　一寸伺ひますが、あなたはお子さんが、おありですか。

客　ありますよ。丁度、今年四歳です。だがなぜそんなことをお尋ねになります。

主　丁度四歳におなりですつて。それはお話に大層都合がいゝ。いゝえ何ね、子どものことを知らない方は、教育のお話がしにくいものでしてね。お丈夫ですかね。

客　はい有り難う。お蔭でまあ普通の方ですが、でも時々病氣をして困ります。此頃も腹を毀して居るんです。何しろ、喧しくいつても間食が多いものですからね。

主　どこの子どもも同じですよ。しかし、間食なんか、嚴重になさつたら、いゝじやありませんか。

客　どこころがあなた、始終家にばかり居るんでせう。また遊び友達はなし、家のものも、そう、しよつちう相手ばかりもして居られず、ついね。

主　ひとりでお遊びになりませんか。

客　それは無理ですよ。庭も餘り廣くありませんしね。都會としては、まあ地面のある方ですが、祖父が盆栽が好きで、秘藏の鉢ものが澤山置いてあつたりして。

主　子どもの遊び部屋は。

客　いやさ、それが可笑しいんですよ。實はね、子どもが生れると直ぐ、或る人に相談して、――その人は女學校

で家事科の先生をして居らつしやる方ですがね、家内の學校友達で、その道の專門の人だといふので、其の意見に從つて、兒童室を拵へたんですよ。光線を充分採るために、他の室と少し離して、壁の色なんかも西洋の建築雜誌からとつたりして、

主　それは理想的ですね。

客　いゝえ、ところがです。極く赤ン坊の間は、そこで暮しましたがね、少し大きくなると、奴さん、その中にぢつとして居ませんよ。始終、われ〳〵の部屋の方へ來つきりなんです。

主　足がありますからね。

客　ハヽヽヽ、そうなんですよ。八疊の理想的兒童室が、今では毎日空き家なんです。

主　お座敷きの方では。

客　子どもといふものは、よく散らかすものですね。なに私共は若いものですし、どうせ平氣なんですが、祖母が、きれいずきでしてね、人一倍。子どもの後から後から片づけるんですが、なか〳〵おつ附きませんや。孫のことゝいふと目もない癖に、散らかされるだけは、たまらないんだと見えます。それに、そろ〳〵ものを散かさない躾もして置かなければならないといふ調子でせう。

主　お庭では御秘藏の盆栽、お座敷きでは、潔癖と整頓教育じや、お子さんも、足がのばせませんね。

客　全くです。そうしちや。鼻をならすんでせう。ウエーファーだつて、あんなに、たてつゞけに食べては、腹にたまりまさあ。

主　實際、家にばかり居ると、そうなり易いもんです。

客　おや。だから幼稚園が必要だと、言ふ譯ですか。

主　よく、そういふ方がありますよ。

客　あなたは、

主　まあ、そんなところにも都合がいゝでせう。併し、幼稚園の必要を、間食防禦策で片づけて仕舞ふのは、少々淺薄すぎますね。

客　では、何か、もつと深酷な理由があるのですか。

主　深酷も可笑しいですがね、もう少し積極的な。

客　そうでせうね。まさか、間食防禦だけではね。

主　お子さんは、何をして遊んでいらつしやいます。

客　そうですね。何こいつて、きまりもありませんがね。繪なんか好きで、よく描いて居るようですよ。

主　美術家の天才がおありなんでせう。

客　ごうして。それだこいひのですがね。隨分變なものばかり描いて居るんですよ。私達の子ごもの時の方が、もつこ、まこまつたものを描いたこ思ふんですがね。

主　あなたは、よつぽごおやりですか。

客　いゝえ、いゝえ。今ぢや、まるつきし駄目なんですがね。子ごもの時は、よく、あんなものが描けたと思ふんです。此の間も、古い用簞笥の引出しから、私の子どもの時の繪が出ましてね。母がたんねんなものですから。

主　お立派なものでしたか。

客　ごうせ、子ごも繪ですがね。それでも、お父さんのは繪になつて居る。坊やのは、めちやくちやだ、なんて、母が子どもに見せたりして居ました。

主　へえ。

客　一つは、松の日の出に鶴。それから、もう一つは、猫に鼠に、犬に獵人の一筆描き。そいつがなか〳〵巧者に繪らしくなつて居るんです。

主　結構ですね。お子さんは、それを見て、何こ言つておゐでゝした。

客　だまつて居ましたよ。何か言ひかけたようでしたがね。家内が、坊やには、こても、こんなうまい繪は描けないでせう。いくら言つても、お手本を見て描かないんですものこ、言ひましたので、叱られたこでも思つたのでせう。だまつて仕舞ひましたよ。

主　ごんな、お手本をお上げなんです。

客　私は、よく知りませんがね。なんでも、いつか、出入りの經師屋が、坊ちやんにこいつて、五六枚描いて呉れたこか言つてました。

主　松の日の出に鶴ですか。

客　そうじやありますまい。父の時から出入りの、一寸、きような老人なんですがね。一枚はたしか、略描きの七福神でした。

主　これは驚きましたね。

客　え。

主　それは、あんまり、おかわいそうですよ。

客　だれが。

主　お子さんがです。

客　なに、家内だつて、そればつかし描かせるんではありますまいがね。しかし、何か手本がなくちやあいけないでせう。

主　手本なんか、いりませんよ。

客　畫に。

主　畫に、……何でお描きです。

客　クレイオンで。

主　それは結構です。

客　ところが、それで落書きをして困るんです。

主　どこへ。

客　昨日は勝手の唐紙に。

主　はゝゝゝゝ。達筆で。

客　それは、まあいゝんですがね。其の前には珍らしく、兒童室にはいつて、おとなしくして居ると思つたら、折角ピンクに塗つてやつて置いた壁一面に、青のクレイオンを横なぜに塗つて仕舞つたものです。

主　痛快でしたね。海のおつもりなんでせう、

客　そうですつて。いやなか〳〵思ひ切つて大きく描いて居ましたよ。

主　そうでせう。

客　私はね。いつもの小さい落書きと違つて、これは、なか〳〵面白いと思ひましたがね。母だの家内だのには、大叱られに叱られて居ましたよ。自分の部屋だつて、こんなことをしてはいけませんてね。

主　泣きましたらう。

客　それでも泣きませんでしたがね。また、こんないたづらをすると、いけないから、クレイオンを取り上げると言はれたら、わあ〳〵泣き出しました。

主　それはお可愛相に。

客　それから四五日して、もう、よからうと思つてクレイオンを出してやつたら、直ぐ勝手の唐紙なんです。始めは小さなのを隅の方へ描いたんでせうが、ついうか〳〵

こ描いて仕舞つたのでせう。おかしな人間の顔を十ばかり並べて描いて居ました。

主　クレイオンをお上げなさつた時、何枚紙をお上げになりました。

客　その時は、私も傍に居ましたが、生憎畫用紙がなかつたので、紙は今度買つて上げますよ。今日は、クレイオンだけ歸して上げませうと、家内が言つて居ましたから、紙はやらなかつたのでせう。

主　あなたは、お子さんの昨日の落書きを無理とお思ひですか。

客　さあ、多少無理もないとも思うんです。何しろ、久し振りで、大好きなクレイオンが手に歸つたのですからね。

主　私も、そう思ひます。

客　しかし、勝手なんかで、かくれて描いたりするのは、いけませんね。

主　かくれなければ、どこで描きます。

客　……。

主　子ども部屋のは、お消しになりましたか

客　いゝえ、まだ。

主　今度、いつか、お邪魔して拜見させて頂き度い位ですね。

客　どうぞ。なあに、つまらないものですがね。青を一面に塗つたゞけで、海の氣分が出てるところは妙ですよ。

主　波だけですか。

客　右手の方に、白で、鳥の樣なものが描いてあります。そばで見ると、一寸何だか分りませんが、少し離れて見ると、たしかに、波の上の鷗に見えるなんかも。子どもの癖に面白いものですね。

主　それだけですか。

客　その鷗を、もう一羽描こうとして居る時、めつかつたのです。

主　その頃、どこか海岸へでもお連れでしたか。

客　はあ、鎌倉へ連れて行きました。

主　その時の記憶を描いたのでせう。

客　そうかも知れません。よく、見たものを描きますからね。いや、どうして、めちやくちやの樣な中に、なかな

か。そう見えるものを描くんですよ。我子ながら感心させられることもあるんです。

主　海の大きい印象は、畫用紙より、壁の方が出ませうね。

客　なるほど。

主　達筆に、クレイオンを塗るのは愉快ですからね。

客　幼稚園でもクレノオンをお使ひですか。

主　はあ。

客　落書きはしませんか。

主　あんまり。

客　壁か何かへ大きな印象も描きたいこともあるでせうね。

主　壁に黒板をはめて置きます。

客　へえ。

主　そこへ、色々のチョークを澤山出して置きます。

客　へえ。

主　今度、いつか、幼稚園に見にいらつしやいませんか。壁黒板に、隨分思ひ切つた傑作が始終出來ます。

客　畫用紙も、お使ひですか。

主　はあ。

客　手本は。

主　與へません。

客　何を描きます。

主　いろ〳〵のものを描きますよ。一枚々々自分の畫を描きますよ。

客　それでいゝのですか。

主　幼稚園の子どもに畫を描かせるのは、繪の稽古をさせるんではなく、心にあるものを、存分に表はさせるんですから。

客　なるほど。

主　お宅でも、經師屋さんのお手本は、およしなさいよ。

客　そうですかね。しかし、手本だけやめればいゝのですか。

主　それからさきは、一寸お話が面倒です。

客　何がです。

主　どうして。子どもに、ほんとうに自分の繪を描ませるかゞ。

客　そうでせう。

主　幼稚園の先生は、その秘訣を知つて居るんです、まあ、一度、實際を御覽下さいませんか。

客　宅では、手本の通り描かせて、よく似て居ないと言つては、描き直ほさせたりして居ますが、それは、いけないのでせうか。

主　松の日の出に鶴を描かせるには、そうしなければなりませんね。

客　こいつは、恐れ入りました。

主　冗談は別ですがね。子どもが自分で描き度いと思ふものをほんとうに、自分の書こして描かせるだけのことでも、やさしい樣で、どこの家でもきつと出來るといふものではありませんね。

客　實際、そう伺ふと、ほんとにそうです。

主　それは繪だけのお話ですがね。子どもの生活全體に、同じ問題がありますね。

客　分つたと申していゝか、どうか知りませんが、お言葉だけの意味は分りました。

主　いゝ保姆の居る幼稚園は、そういふ處に、子どもの心を活かし育てゝ行きますね。

客　いや、大分わかりました。もつとよく私も自分で考へさせて頂きませう。

主　これで幼稚園の必要の理由の全部を申上げたのではありませんよ。自分の子どもをもつて居るものは、場所の點からも、親の力の點からも、家庭だけでは、充分でないことを思ふものですね。

客　實際です。

主　實際の話です。そこで、いゝ幼稚園が、我子のために、ほしくなるのです。

客　どうも、大層長くお邪魔しました。今日は之れで御免蒙りませう。

主　さようですか。是非一度、幼稚園の實際を見においで下さい。

客　有り難う御座います。きつと近日に伺ひます。では、さようなら。

主　さようなら。

子どもの惡癖とひがみ

天野誠齋

惡癖矯正の呼吸

□味ふべき格言

不良少年となつたり、又不良少女となる、この家庭を見ますと、多くは家庭の罪で、夫れに陷らしむる動機が茲に御座います。

けれども是れを、單に家庭の罪、家庭の不取締にのみ歸する事は出來ません。

『弱き身體は、また其の心靈を弱くす、兒童は弱きが故に惡しきなり、强からしむれば、以つて善き者とならん』

是れはルーソーの述べられた詞ですが、是れこそ兒童の惡癖矯正について、味ふべき格言であると思ひます、少年少女の心の惡い、所謂

『不良』

の二字を冠らせられますものゝ體格を檢査して見たら、必ず不健康が伴ふて居ると信じます、體質が人並に發育しませんで、虛弱であるから、遂に心も惡くなつて、ルーソーの述べられた意味に陷ることゝ考へます、詰り心の惡いものは、矢張り身體にも缺陷があつて、虛弱不健康と云ふ順序になつて參ります。

□體質上の缺陷

夫れですから、子供が亂暴を働くとか、又非常に强情で親の云ふ事や、教師の云ふ事なども用ゐないやうな、手のつけられない子供がありましても、現はれた行爲にのみ重

きを置き、叱りつけましたところで、心の改まるものではありません。

宜しく親たるものは、この子供の心意に立入つて、深く考へてやらなければならないのです。

夫れを唯、頭から叱り飛ばしたところで、此の悪癖を矯正する譯には參りません。

況してや意志の力の極めて弱い子供の事です。其の弱い意志をますます弱くさせるのは、體質の上に必ず缺陷があるので、生理上から仔細に檢査されましたら、爾う云ふ子供の身體には、何處にか缺點がないと申されません、例へば非常に神經質で、神經が過敏になつて居りますとか、又神經の過敏になるべき他に病原がありますとか、病原が去つても恢復期の處置が悪いので、神經衰弱になつたとか、耳が悪いとか、鼻が悪いとか、内臓の孰れにか故障がありますとか、素人には少しも其の不完全な點を見出されませんでも、其の道の專門家が檢査しましたら、之れを發見されることがありましやう、即ち意志の弱いものも、體質の缺陷のあるためで、夫れから强情にもなり、亂暴者にもなつて、親の手にあまる事になりますと、斷言してもよいかと存じます。

口小言の効力がない

子供が、親の命令を用ゐませんで、暴れます、爾うすると直ぐに鐵拳が飛んで往きます、子供は鐵拳に驚いて一時は烏渡亂暴をやめますが、親の眼を離れゝば、また直ぐに暴れ出します、斯う云ふ風にして仕舞つては決して小言の効力が無いので御座います。

子供は一度教へますと、其時は守つても、又直きに忘れて仕舞ひます、之れは子供時代は感情一點張りで、意志の力が極めて弱いのですから、例へ身體に或る缺陷がないとしましても、一度教へたのを後にまでも、夫れを守らせるのは不可能な事です。

善い事か、悪い事か、之れを仕て良い事か、或は之れを仕て悪い事か、その判斷を意志でするやうな慣習をつけさせますのは、之れは親として、兒に盡す當然の教育法であると思ひます。

□教誨師の實話

或る教誨師から斯ういふお話しを承りました。

此のお方は北海道の監獄に、永い間教誨師をして居られましたが、ナニシロ殘忍酷薄なる罪人で御座いますし人の命を屠ることなどは、犬猫でも扱ふのと、同じやうに心得て居るやうなものですから、なか〳〵之れを善道に導くには、教誨の方法と、教材話題何一つ缺けてはなりません。

處が此の教誨師は囚人を集めて、諄々として教へを說くに當り、

『斯ういふ寒い〳〵雪國へ來て居て、故郷の便りさへ少なく、寂しく暮して居るのは、犯した罪とは言ひながら、如何にも氣の毒に思ふ、噫、故郷に居る父母や、又は妻子の身の上は何うであらうか、那の悴は心がらとは言ひながら、今頃は定めし苦しんで居るであらうと、親は心中に泣て居らう、又妻子の胸には片時も良人たり、父たる人の恙なきことを祈らぬ事はあるまい、ア、實に熱き涙に泣かぬ日はあるまい』

と云ふやうな、感情に訴へた教誨をしますと、鬼のやうな罪人でも、直に涙をホロ〳〵こぼして泣いて居るさうです、夫れでは斯ういふ教誨を聽いて、全く過ちを悔ひ改めますかと云ふに、爾うではないさうです、ホンの之れは一時の現象で感情に動かされたのです。

ソコで教誨師は考へられたさうです、斯ういふ教誨の仕方は何んの効力もない、過ちを悔ひ改ため、善良なる道に進ませますには、意志を鞏固にさせ、例令ば如何なる誘惑がありましても、其の誘惑に打ち勝ち、如何なる苦しき境遇でも其の境遇に打ち勝つやうにさせる方針を取らなければならぬと云ふお考へになつて、教誨の方針を一變されたさうであります。

私は此のお咄しを承りまして、

『成程此の教誨師の被仰ることは眞理である』

と思ひました。

此の呼吸は矢張り、兒女の惡癖を矯正しますには、肝腎な方法で、感情に訴へて教へるよりは、意志を鞏固にするやうに教へ、善惡の判斷を意志でするやうにし、おい〳〵

夫れが習慣になるやうにしなければならぬ事と思ひます。

子供のひがみ根生と矯正の手加減

□朝顔の蔓

植物でも、何んでも同じ事、ものには天性と云ふものがあります、朝顔の蔓のやうなものでさへ、時計の針と反對に、左に捲く性質がありますから、試に繩で結び、之れを右卷きにしやうとしても、いつか夫れが左卷きにならうとする激しい運動のために、一種ひねくれた妙な蔓の形になつて仕舞ひます。

之れを見ましても、まだ人にならんとして、この半途にある兒童の教育は、矢張りこの天性を損ふてはなりません。

□少しづゝ矯めよ

若し生れたばかりの小兒を、初めから干渉なしに育てると、唯先天性の方にばかり向つて往きます。

教育と云ふのは、少し片苦しくなりますが、詰り親々の注意は、此のわるい方面の先天性を、時に少しづゝ矯め直す位が程度でありまして、親々が自分の性質から割出した、夫れにあてはめやうとするなり、或は又子供の性質を、全くぶち壞して、親々の思ひ通りにすると云ふことは、非常に宜しくない事です。

若しも斯う云ふ考へをもつて、子供を教育するといふ親々がありますなら、その親々の考へは大層な考へ違ひであると思ひます、何んの事はない、今申した朝顔の蔓の自然性を矯めると同じやうな結果になりますから、先天性をいたはると云ふことが、非常に大切であります。

□子供心にも不愉快を感ず

取分け子供の遊戯は危險でない限りあまり、家庭に故障の無い限り、したい事を十分にさせる事にしたいと思ひます、子供の先天性として非常に變化を好み、與へられたものが如何に氣に入つても、長時間玩ぶことは、到底堪えられん事です。

茲においてか自づと手が大人の室にまで及ぶ、果は日常の家具、器具類に及び、遂には盆栽を損じたり、床の置物を傷めたり、手當り次第なお悪戯をして喜びます。

ソコで之れを發見した、母親なり、召使ひなり、突然飛出して

『飛んでもない事をされましたネ、それはお父さまの大切なものですよ』

とでも云はうものなら、子供は定つて泣出し、今まで愉快に遊んで居た興味は破られ、子供に取つては此上の不愉快はありますまい。

□遂に僻み根生を起す

一體日本の家庭では、子供の喜びさうなものを、子供の手の屆き易い處へ飾つておき、若し誤つて子供が、夫れを損めでもしやうものなら

『それは不可ん』

『之れも不可ぬ』

と叱つて取揚げると云ふ有樣です、夫れ故子供心にも

『不平と怨恨』

とが絶えず殘るやうになりましやう。

のみならず此の不平と怨恨とが、知らず識らずの間に遂には、ひねくれた、ひがみ根生になり、丁度朝顏の蔓が自然性をためられたと同じやうになるのです。

□親の罪が深い

自分の家にある、家具器具を子供等が自分のものと解して、夫れを損じたり、破つたりするのは致し方がありません、甚しいことを爲ない限り、之れは成るべく叱らないやうに致さねばなるまいと思ひます。

一つ物を何時までも持ち續くことの出來ない子供が、夫れを破損して、更に其の變化を見て樂しむといふところに殊に子供の向上心、進歩心、若くは其の好奇心があるのです。

子供に好奇心のあるのは、丁度哲學を究むる學者に、疑問が起つて、其處に新らしい研究の起るのと、同一の事ですから、物を破損する子供を、譯なしに叱るといふことは

禁物です。

若しも破損されて惡いやうなものなら、子供の眼のつくところ、其の手の屆くところへ置かぬに限ります、此の注意を缺いて、夫れで子供の罪のみ責むるのは、責める者の罪が深いのです。

□しつけ方の秘訣

夫れから子供に持たせて惡いものが、子供の手に入つて、何うしても夫れを放さぬとき、何にも代りとなるべきものを與へずに、遮二無二もぎとらうとするやうな親達もありますが、代りの物を與へずに取るといふことは矢張り子供の先天性を害します、先天性を害す、害さぬと云ふところに、

『子供のしつけ方の一大秘訣が含まれて居るやうに思はれます』

是れも子供の先天性とでも申しませうか、貴人の家に生れた女兒でも、女兒と云ふ、その先天性のいたすところであるものと見えまして、少し物心のつく頃から子守遊びを始めます。

子守と申せば、卑しい少女のすることで、多くは召使女のする事ですから、貴人の女兒が、長じて此の必要を生ずる譯もありません。

また爾ういふ遊び方を、左まで教えませんところの女子供が、自づと子守遊びをして、愉快に子守唄など唄ひますのも、畢竟其の先天性から來るのです。

即ち生れながらにして、女は產んだ子供をそだてるものと、已に自覺せる性質か、此の行爲をさせるのでありましやう、此れを見ましても、人の先天性ぐらゐ、大切にしなければならぬものはなく、また之れを損うてはならぬと思ひます。

朝顏の蔓にたとへた通り、子供の先天性を、損はぬと云ふことは、男の兒でも、女の子でも同じ事で、之れに對する手加減が、即ち親の責任ある教育ではあらうと思ひます。

初夏の幼兒の保健について

東京帝國大學講師　醫學博士　太田孝之

日增に氣温が騰つて來まして暑さの季節に入りました上に、殊に梅雨期では空氣中の濕度が增す爲めに、むし暑いといふ感が我々の身體にいろ〳〵の影響を與へます、平生健康な人でも幾分仕事に對しての輕るい倦怠を覺えたり、多少疲勞する氣味であつたり、又は食慾なども多少衰えて來ます。

氣温が騰つて來た上に梅雨期のやうに濕度が非常に增しますと、種々の黴菌の發育には都合のよい條件となりますから、家財や手まわりの道具などの餘り黴菌と緣の遠いやうに見える品物にまで黴が生えて來ます、此は黴の發育に適當してる温度や濕氣のある爲めであります、夫して我々の口に入れる食物は蛋白質もあり脂肪もあり含水炭素もあり鹽類もあり水分も含まれてゐて、微細な生物である黴菌の增殖に必要な滋養分でありますから、黴菌の發育に適當な温度に氣温が上り又た濕度が增して來れば、時を得顏に發育することは容易に理解が出來ます、何故この季節に食物が腐敗するか　是は申す迄もなく食物に附着してゐる眼に見えぬ細微の黴菌、それもいろ〳〵の種類がありますが、すべて盛んな發育と增殖を遂げることが出來る爲めであります。

又たこの季節に增えて來ます蠅を恐れる理由も此處にあります、蠅が夫れから夫れと不潔な場處を飛び廻つて來て、身體に多數の黴菌を附けたまゝで家の中に飛んで來て食物にたらしますときに、その黴菌を食物の上になすり附けて黴菌を植えつけて行き、夫が爲めに食物が腐敗することになります、更に恐ろしいのは有害な病原の黴菌、例へ

ばチブス菌や赤痢菌、さてはコレラ菌などを、病人の身體から出た不潔物から運んで來る事であります。

現今の東京のやうな大都會は、地方に比べて總ての設備が可成衛生的に進歩して來てゐても、一年中チブスが絶えなかつたりして四季斷えずに流行のあるのは、塵埃の始末下水や溝又は井戸から便所などが、歐米各國の設備　比して遙に劣つてゐるからと、一般の人々　衛生に對する理解もまだ〳〵低級のものであるからと歸納せねばなりません。

そこでこの季節の幼兒に對しての保健について注意を述べますなれば、以上の事實を考へて注意して兒童を取扱はねばなりません、夏季は幼兒の生活の機能が幾分鈍いから胃腸の消化の機能も鈍くて弱り易い、これ故榮養上に注意して機能の鈍い内臓を弱らせて、障害を起させぬ樣病氣にならぬ注意することが肝要であります、夫れには餘り不消化のものを食べさせたり、或は餘り分量を過して食事を與へたりせぬことを注意せねばなりません、假令ひ消化のよいものでもこういふ季節に過分に與へては矢張病氣を惹起す原因になります、冬から見れば食事の分量は幾分控へ目にすること、餘り美味いからといつて無暗に食べ過ぎぬ樣に注意せねばなりません。

又た前述べた樣にさなくても食物が腐敗し易いから、うつかりと腐敗した食物を與へますと、この時期には直ぐ胃腸を傷つて病氣を起しますし、又種々の病的の黴菌のついてゐる食物を與へれば、その病的黴菌の傳染を受けてチブス赤痢等に罹ります、間食の菓子などにしても餘程種類や分量を、平生よりは一層注意して與へる樣にせねば胃腸を傷ひます、寒い季節に餡の入つた菓子や砂糖分の非常に多い菓子を食べて何ともない幼兒でも、夏は夫が爲めに腸を惡くしたといふのは全く以上の理由で說明が出來ます、菓子ばかりではありません果物も同樣で食べ過ぎれば同じ樣な結果になります、幼兒をもてる家庭ではこの時期には食物の貯藏といふことにも注意して食物を腐敗せぬ樣、又た清潔な場處に蠅や蚊や虫などの絶對に寄りつかぬ場處を選まねばなりません、貯藏するとしても出來るならば割に腐敗し難いパンや菓子や果物の類までも、温度の低い冷藏函

の内に貯藏しておきたいものであります、それよりは常に新鮮な食物即ち新鮮な材料から調理して直に與へることがよいのであり、果物にしても何にしても新鮮なものを與へることが出來れば最も理想的であります、私は暑氣と食物の腐敗の關係を一目に理解出來る參考に、幼兒の重要の食物の一である牛乳の中の黴菌の數が、いかに暑氣に關係して多くなるものかを示して見ませう、冬搾り立ての新鮮の牛乳の一立方糎の中に含んでゐる黴菌の數が、或る檢査では一萬七千匹でしたが、同じ牛乳が夏搾り立てのものでは三萬匹ありました、又他の人の檢査したのでは、牛乳の一立方糎の中の黴菌の數は新鮮の搾り立てのものでは僅に九千三百匹でありましたが、此牛乳を攝氏の十五度の溫度で十五時間貯藏しておきますと十萬匹となりました、溫度攝氏二十五度の中で同じ時間後には七千二百萬匹に增えました、牛乳の中の黴菌の數が非常に增えたといふ事は即ち牛乳の腐敗が盛に行はれてゐる證據であります、攝氏の十五度と申すと、華氏の五十九度になりますから丁度春の氣溫であり、攝氏二十五度といへば華氏の七十七度でこの頃の夏の初めの氣溫になります、此檢査を見ても夏の氣候と食物の腐敗し易いことがよく分かります、實に黴菌繁殖の狀態が肉眼に見えぬとはいへ恐るべきものであるといはねばなりません。

私は同じ理由で夏は幼兒が多少食慾が活潑でない時には三度の食事に際し食慾の進まぬのを無理に强いて、御飯の分量を平常のやうに充分に食べさせやうと勸めないでもよいと信じます、最も全然食べないで却つて間食を欲しがるといふやうな事は嚴重に制せねばなりません、又た反對に自分の好む菜であるからといつて、いつもより餘分に食べようとせがむ時には抑へて止めさせねばなりません。

赤痢疫痢についての保健上の注意については次號に述べるとして、こゝには最近東京市の下町で流行してゐます、小兒腸チブスの豫防上について一應注意を述べておきます最近流行のチブスの經路はどういふのでありますか未だ詳しい報告を聞きませんが、チフス流行時に第一に注意すべきことは、生水(なまみず)をのませぬことであります、勿論水道でありますと殆んど、其危險や、心配はないが、こういふ際に

はやはり生水は控えた方がよいのであります、井戸水は今日市内では普通飲料水には用ゐませんが、井戸水には細菌類も不潔な有機物も多く含まれてゐますし、殊に流行地の井戸水にはチフス菌の混入の危險もあります、普通用水に使用するにしても餘程注意しませんと危險であります、こういふチフス菌のある井水で皿や茶碗を洗つただけでも傳染の危險があるといはれ、果物や野菜を同じ水で洗つて生のまゝ食べても傳染するといはれてゐます、蠅や蚊の驅除にはわけて苦心せねばなりません、又た食物もすべて生まのまゝでは幼兒に與へぬやうにし、果物の如きも水道の水でよく清潔に洗つてから與へねばなりません、其他過食寢冷えを用心し、食事の前に必ず幼兒に石鹼で手を洗はせることを注意してやり、又流行地では戸外に土いぢりして遊ばせぬ樣にし、戸外から歸つて來ても手を一々洗はせた方が安心であります、最後の豫防法はチフスの豫防注射を行ふのであります、何れにしても萬一幼兒に熱が出て不機嫌でありましたら、一應醫師に診査を受けた方がよいのであつて早く治療を受けることが肝要であります。

大東京市民當選歌詞

市歌（一等）

高田耕甫作

一、むらさき匂ひし武藏の野邊に
日本の文化の花咲き亂れ
月かげ入るべき山の端もなき
昔の廣野おもかげいづこ

二、高閣（たかどの）はるかに連りそびえ
都のどよみはうづまきひゞく
帝座のもとなる大東京の
伸び行く力の强きを見よや

三、大東京こそわが住むところ
千代田の宮居はわれらが誇り
力をあはせていざ發ち友よ
我等の都に輝き添へむ

童謠（一等）

吉田榮次郎作

一、日本一の東京よ
それはどなたがしたのです
ちいさなばあさましたのです

二、東洋一の東京よ
それはどなたがしたのです
とうさまかあさましたのです

三、世界一の東京よ
それはどなたがするのです
それはわたしがするのです

夏の自然

―季節の科學―

東京女子高等師範學校教諭　堀　七藏

一　夏はどうして暑いか

分り切つたことであるがさて聞かれるとはつきり分らぬ問題である。尤も地球で寒暑の原因は太陽の輻射にあることは明白であるが、夏の暑いのは何故か。一寸注意すれば分るが、夏は冬よりも太陽が遙かに遠いのである。太陽が地球より遠い程火鉢より遠ざかつたと同理で寒くなる筈である。それが却つて夏暑いといふ事實はどこから起るか。疑もなく冬の太陽は吾々を斜上から照らすが、夏は頭上からまともに照らすといふ理に基く。火鉢の火の眞上に手をかざすと熱いが横から斜にさし出した手にはあまり熱くない。丁度それと同理である。頭上より照らすときの日射量は斜上から照らす時の日射に比して遙に多い。從つて地球上各地の日射量が異る赤道附近では三月、十月に日射量が最大で、夏至と冬至頃には最小である。所が吾々日本人が棲む北緯三十五六度のところでは日射量が六月に最大で十二月に最小である。それで夏至即ち六月二十一日頃が日射量最も多く、冬至即ち十二月二十三日頃が日射量が最も少いのである。

誰もよく承知してゐる樣に一年中最も暑いのは八月で、攝氏二十五六度を呈する。最も日射量の多い六月ではなくして八月であることには相當理由がある。それは六月が日射量最も多く、晝最も長きを以て地面の熱せられることが最も多いが、更にその後と雖も地面の熱を受くる量が、地

面が輻射によつて失ふ量よりも多いから、從つて氣温も八月が一年中最高を示すのである。八月以後になると地面の受くる熱が著しく減少し、地球の輻射によつて失ふ熱量が多くなるから段々冷却して氣温が下降し、涼しくなり寒くなるのである。かく單に夏が暑いといふ事實を說明するにも中々六ケしい理由がある。

二　富士山が高いのに何故夏も雪があるか

富士山でも日本アルプスでも高い山は太陽に近いから平地よりも暑いのが道理であるらしい。しかし實際は左樣でなく、三伏の夏尙ほ千古の白雪を戴けるは高い所が寒いからである。この理由は甚だ複雜してゐる。元來空氣は太陽熱を透過して吸收することが殆ごないから、高くても空氣の暖まることはない。しかも地表に接近する空氣は地面の熱せられるに從つて暖まるが、熱を導くことがないから、地面に接近する空氣によつて高い所にある空氣の熱せられることが殆ごない。更に高い所は太陽に熱せられてその熱を吸收する地面も狹い。その他氣壓が減少するによつて空氣が膨脹し、爲めに熱を要する等の理由が複雜に重つて、高い山もまた高い空でも非常に寒いのである。

三　陽炎はどうして出來るか

燒附くやうな夏の野道を行くと陽炎がゆら〳〵と、如何にも暑そうに立昇るものである。また夏、屋根瓦の燒けてゐるときも陽炎が立昇る。この陽炎は地面や屋根瓦が強く熱せられ、それに觸れてゐる空氣も亦熱せられる。この熱せられた空氣が膨脹して上昇するとき日光が之に反射するので陽炎となつて現はれるのである。

四　庭に打水をするとどうして涼しくなるか

これも分り切つた問題である。しかし詮議すると相當八ケましい理由がある。今まで日光に強く照らされて熱せられてゐた庭に水をまけば、水はその熱のために著しく蒸發する。蒸發するときには多量の熱を要する。一グラムの水

が悉く水蒸氣となるに要する熱量は五百三十六カロリーである。一グラムの水が温度一度昇るのに一カロリーしか必要でないのに水蒸氣になるには五百三十六カロリーの熱を要するのであるから、この氣化熱のために空氣並に周圍のものゝ熱を多量奪ふことが非常に多い。それで涼しい風を生ずるのであるから、夏は庭にでも床にでも度々水をまくがよい。恰も浴後、身體についてゐる水分をよく拭き取らないと風をひき、發汗後涼しく感じ、濡れた着物をつけてゐると風邪にかゝることがあるのも、同樣の理窟によるのである。

五　夏氷水を入れたコップの外側に水滴を生ずるは何故か

氷水を入れたコップの外側に著しく水滴が生じてゐるので、これはコップにヒビでもあつて氷水がしみ出たのではないかと怪しむ位である。事實子供などはコップを通して水がしみ出たものゝやうに考へてゐる。しかしそれは大なる誤解である。硝子壁を通して水は容易に出るものでない。ヒビがあれば兎に角として、氷水を入れたコップの外側に水滴がつく道理が分れば露の出來る譯も自然分るのであるから一應說明するもよからう。

水は蒸發して水蒸氣となること。水蒸氣は眼に見えないこと。夏の温まつた空氣中には割合に多く水蒸氣を含んでゐること、水蒸氣は冷却するとまたもとの水にかへることなどから容易に說明が出來る。眼には見えないが氷水を入れたコップの外側に接觸する空氣は相當多量の水蒸氣を含んでゐる。それが氷水を入れた冷いコップに觸れてゐるから冷却して多量の水蒸氣を含んでゐることが出來なくなり水滴となつてコップに附着するのである。

六　夜露はどんなときに出來るか

夜露の出來るのもコップの汗と同理である。日中水蒸氣を相當多く含んだ空氣が朝方になつて冷える。このとき空氣中の水蒸氣が冷却せる草木或は地面等に觸れて凝結したものである。冬の如く零度以下で凝結すると霜が生ずる。而して露でも霜でも曇つた夜には生ぜずして晴れた晩に多

い。これは雲で覆つてゐるため地面の冷却することが少いからである。

尙ほ露の多く出來るのはどんな所か、またどんなものかも注意すると面白いであらう。

七　夏雲の立峰多きは何故か

夏の自然を彩るものは何といつても雲である。夏の雲にはいろ〳〵面白い形をしたものが多い。所謂入道雲もあればまたむく〳〵雲といふこともあり、雷雲とか夕立雲とかいふこともある。注意して見ると單に雲といつても千變萬化、千姿萬態といひたい位である。元來水蒸氣を含んだ空氣がだん〳〵上昇するに從つて冷却する。それは高く昇ると自然に寒いからでもあるが、また高く昇るに從つて氣壓が減少して膨脹するために空氣自らの熱を費すからでもある、兎に角水蒸氣を含んだ空氣が高く昇つてその溫度が降る。溫度が降つた爲めに含んでゐた水蒸氣が凝結して細かき水滴となる。又零度以下に冷却し凝結して氷片となる。この水滴又は氷片は微細なる間は恰も空氣中の塵埃が浮游するやうに空氣中に浮游してゐる。之が雲である、だから雲には微細な氷片からなるものも水滴からなるものもある。若し飛行機に乘つて雲の中に入ると地上の人が霞か霧の中を歩くときの樣な感じがする譯である。霞と霧は地上低き所に生じた雲と考へてよいもので、之を生ずる理窟は雲を生ずると全く同一である。

八　雲は雨の親か雨が雲の親か

雲になつて空中高く浮游してゐる水滴や氷片が互に合するかどうかして大きく重くなると落下する。之が雨であり雪である。故に雲は雨の親であるといつてもよい。しかし雨が地上を流れて河水となり、海にたまつて海水となる。それ等より蒸發せる水蒸氣が天に高く昇つて雲となるのであるから、雨が雲の親であるともいへる。元來雲といつても雨といつても、水で水がいろ〳〵に變じていろ〳〵の現象を呈するのである。孰れが元であるか、親であるかを議論するのは丁度鷄が先か、卵が先かを論ずるやうなもので愚な沙汰といはねばならん。

可愛らしい光姫たち

よし　を

光姫の女王の御殿は小さな丘に建つて居る。その御家には多くの水晶の窓があり、其大きな圓い屋根は高くに聳えて居る。花子達が其御家の御門の内へ入つて見ると女王エルマは非常に愛らしい六人の侍女にかしづれて居た。其六人の人々は非常に愛らしいので誰と云つて例へやうのない位でした。花子は美しさに見とれました。此の六人の女の人は手々に竿を持つて居る。其竿の先には何の光か分るやうに徽章をつけて居た。其着物にも光の模様がついて居た。私共が其立派な御家へ行つた時、女王エルマは其侍女達に花子達を紹介して呉れた。此の六人の人達は大變喜んで私達に丁寧に、氣持よく挨拶した。

其中で一番初めの綺麗で、美しく、奥ゆかしい人は日光（ヒノヒカリ）と云ふ名の人で、其次は月光（ツキノヒカリ）と云ふ人でした。此の月光りと云ふ人は黒漆の毛をした、柔らかい、一寸夢の樣な淡い目をして居る可愛いお孃さんでした。其次は星光（ホシノヒカリ）さんと云ふ人で、月光さんと同じやうに愛らしい人でしたが、一寸引込み勝で、憶病でした。此の三人は銀色の白いキラキラ光る上衣を着て居ました。四番目は晝光（ヒルノヒカリ）さんと云ふので、にこにこした目や、活潑な樣子をして居る人で、種々の色のついた光つて居る着物を着て居る。其次には火光（ヒノヒカリ）さんと云ふので、キットした美しい姿のまはりをゆれて居る樣に見える炎の樣な色をした着物を着て居た。第六番目の腰元の電光さん、（エレクトラさんとも云ふ）此の人は六人の中で一番綺麗な方でした。花子は初めから、日光さんに、晝光さんは此の電光さんを羨ましがつて、多少やきもちをやいて見て居る樣に思つた。

然し此の六人の人達は皆初めて茲に來た花子達に大變親切に案内して呉れた。姫等の女王も又大變親切に花子達をもてなして呉れた、何故かと云ふに女王は自分のいつもの居間へ花子を通して呉れて、此の六人の待女等と一緒に色々面白い話を聞かせて呉れたからである。

此の御部屋は非常に澤山の飾があつて、體裁よく飾られ、然も此等の飾りの品には種々樣々な色をして居て、目も眩むばかりでした。山を歩いてつかれ切つた花子が思ひ切つて此處へ入り、休ませて頂くことは花子に大變うれしく思はれた。

その中に又他の御客が來た。此の御客は女王となかよしだつたので、女王はどうとう其の人も、此處へ通して、今は面白さうにペチャ〳〵話して居られる。此の御客さんは「今女王エルマの側に座つて居るのは畫光さんだけですねと」花子に教へて呉れた。其他の待女達はもう其御隣りの室へ引込んで、可愛らしい雪の樣な色した、格恰のよい手を膝に置いて座つて居て出て來て、お客に御挨拶はしなかつた。

女王は花子達や初めて見た此の綺麗な御客さんに、此の美しい王國の話をして、此の國は人間の色々の必要なことを司どる、妖精（スプリト）の大きな住家の一であることを教へて呉れた。

此處はほんとうに大事にせねばならぬ妖精（スプリト）の住家であつた。彼等は御互にけんくわをせぬため、未だ人間に一寸もつとめをせなかつたものの中から、一番えらい人を其國の支配者として選擧したのである。つまり普通の市民から支配者を選擧したのである。ちやうど皆の御父さん達が市會の議員を選擧なさるやうに。此の支配者、且稱號はヂンヂンと云ふのであるが、チ、チ、チ、ホウヒャウと云ふ名の人でした。ヂンヂンと云ふのは市長と云ふのと同じことなのだ。此の人のおかしな事は情（ハート）の無いことなのだ。ホウヒャウさんは、情（ハート）が無いかはりに、非常の理屈やで、正しいことを好む正義の心を持つて居た。それで此の人は何か裁判をしてうまく行つても、一寸も嬉しがらなかつたけれども、又不正な罰を加へたり理なしに人をいぢめなかつた。その代り、此のチ、チ、チ、ホウヒャウさ

んは情(ハート)のない人ですから惡いことをした人に取つては非常に恐ろしい人でした。然し惡いことを何とも思はぬやうな人々は一寸も恐はいとは思はなかつた。

此の妖精(スプリト)の國の王樣達や女王達は、ヂンヂンさんを大變尊敬した、何故かと云ふと他の人によく云ふことを聞いてもらうのには、自分達はまづ其上の人の云ふことをよく聞かなければならぬと云ふことを知つて居たからである。

話しの國の人達は此の恐ろしいが正しいヂンヂンさんの話をよく聞かされたものだ。此の人の刑罰にも常にいくらか間違ひはあつたが正しいのでよく知られて居る人だ。生れて一度きりしか會はないけれども花子の案内者の次郎は此の人をよく知つて居る。然し此の話を聞く子供は恐らくこんな人について聞いたことがあるまい。花子さんも始めて此の話を聞いたのであつたが非常に面白く思つて、もう此のヂンヂンさんを恐がらなくなつた。

私共が話をして居る中に時間は進んで行つた。次郎はふと光の女王の傍に座つて居るのはもう晝光ではなくて月光であることに氣付いた。

花子は云つた。「何故あなたの上衣にはみんな龍の頭の縫が置いてあるのですか？どうぞ教へて下さい」と賴んだ。

エルマの愉快さうな大きな顏は、かう云つて眞面目に變つた。

「龍はあなたも知つて居る通り、世の中に一番先きに住んで居たものです。それで龍は一番の年寄りで、生きて居たものの中では一番賢いものです。幸にも一等始めに生れた龍はまだ生きて居て、然も此の國に居て、必要な時は何時でも私達に智惠を分けて呉れます。此の龍の年は世界の年と同じで、世の中が作られてからこちらへ、起つた事件ならば何でも記憶して居るのです」

花子は云つた。「其人は子供を生みましたか？」

「さうです！　澤山生みました。其中のあるものは外の國を歩いて居ます。其龍の子の分らぬ人間は、其處で戰爭したり分らぬ子供はけんくわをします。此の國にも、まだ澤山居ます、然しその子も一等始めの龍のやうに賢くはありません。それで私達が此の一等始めの龍を尊敬するのです。彼は此の國に始めて生んだ人ですから、此人に私達は

此のおとぎの國に住まふ權利を持つて居る愛すべき人間であると云ふことを示すために龍頭の縫を置いた衣物を着るのです。此のおとぎの國は話の國と同じやうに美しいのですが、此方の方が力は強いのです」

「あゝ龍つてどんなものか分りました」と次郎は可愛い頭をうなづかせながら云つた。花子にはチットも分らなかつた。然し花子は今光姫たちが交替するのを面白く見て居た。晝光女が月光女と交替したやうに月光女と星光女と交替し、星光女は女王エルマの右側に座つた。星光女が入つて來ると平和の精神と滿足の氣が室中に滿ちたやうに思はれた。次郎は妖精なので、此の遠く距つた國に住む種々の王や女王について色々のことを尋ねた。かれこれして居る中に此の星光女は次郎と共に引退つたので、エルマが其間に答へない中に、室は薔薇色に紅を呈し、火光女が女王の傍に座はることになつた。」

花子は火光女が好きであつた。然し彼の女の温い愉快さうな顏を眺めて居ると眠くなつて仕舞つた。やがて花子はコツンコツン船を漕ぎ始めた。

かの女は「御飯時が來ました、御飯は並べられました」と云つた。

子供　は「やあうまいぞ、ひどく腹がすいて居るので御飯の事ばかり考へて居た。然し私はあなたのお伽噺の御飯が頂けるか知らん」と云つた。

女王は微笑みながら戸口の方へと案内した。彼の女が重い暖簾を押すと其處から銀色の光りの流が出で來り彼等を歡迎した。花子は自分の前に澤椅子のある廣間と、雪の樣なリンネルがかけてあるテーブルや、其上に置いてある水晶や銀を眺めた。其一方に板の間があつて、其處には女王エルマの据はる薔薇のやうな椅子がある。それへエルマが座はると一等綺麗な腰元の電光女が傍に座つた、ボールは女王の右手に花子は其左手に座つた。今は他の五人の腰元も其席に着き、何れも女王の一等好きな御馳走の前に座つた。ボールは自分の露滴の皿を見出した。それは非常に新しくキラキラして居た。花子は一生涯その半分もおいしく食べられるやうな御馳走に出會はなかつたやうな美味し御馳走にありついた。

花子が云ふには「私は皆んなの中で電光女が一番年若だと思ふ」と女王に云つた。

エルマは笑ひながら「どうしてそんなに思はれますか」と聞いた。

花子「何故かなら電氣が一等新しい光だと私は聞いて居ます、電氣はエデソンが發明したんじやないんですか？」

女王は「さうだ、多分彼が電氣を發明した最初の人であつたであらう」然し電氣は作られた時から世界の一部であつた。だから電光女は晝光女や、月光女と同じ事で、人間にもお伽噺にも同じく大變必要なものだ」と云つた。

「私達は電氣なしには、うまく生きて行かれませんね！出來ますか？」

エルマは靜かに笑つて云つた。「確かに私には出來ません。そして私は、此の私の侍女のどれ一人失つたとて同じこと、うまく暮して行かれないであろうと思ひます。月光は吾等に力とエナージーを與へる日光に代はることは出來ぬ　月光は晝光が永い間働いたので休んで居る時に價値がある。道を歩いて居るお月さんが地球の椽に隱される時、あの美味い月の光は私共を喜ばして呉れぬ。其時に星が代つて天を照し、其力を貸して呉れます。火光がなければ私共は温さを失ひ樂をなくします。其他の光もそれそれ私共の爲めに働きます。電光女は美しい光を送つて呉れて、色々役に立つことは聞いて居るでせう。光の女王として、此等の侍女が忠實に私の爲めに働くので、私はみんな可愛がつてやります。

花子は

「私もさうです。だけれど、眠いときには何もなくてよろしい」と云つた。

「ぢや花子さんは眠いのですね」とエルマが聞いた。

花子は、

「エイ、少し」と云つた。それでエルマは腰元の光姫等を連れて、柔かい氣持のよい寢床へ、花子を案内した。そして戸を閉めて外へ出て行つた。花子は暗い所で何も知らずに夢路を歩いて居ます。

兒童藝術と彫塑展覽會

曠原社　朝蔭其明

兒童藝術文化普及の聲が高まるにつれて、童話・童謠・童、話劇自由畫といつたやうな麗梅に、兒童に對する大人のそうした方面の注意が、いろ〳〵な形式を取つて現れ、兒童の藝術的精神を保育、涵養しやうとする、眞面目な試み、意義ある運動が、近ごろ、著しく盛んになつて來た。

一體、我等が諸種の運動を起して、兒童に藝術教育を普及せんと努力する所以は、單に兒童の藝術的精神の保育に資せんとする、兒童本位の仕事とのみ見る事は出來ない。大人の眼は屢々理智の爲に曇を生じてゐるものである、兒童の作品を見ることによつて我等は、曇つた眼を洗ひ、忘れられてあつた自己の本體を見る事が出來るのである。こゝに兒童の繪がある。進行しつゝある汽車、地に豆を拾ふ鳩、それらが何らの制縛を受けることなしに、そして些の侵蝕をもされずに、のび〳〵した、自由の精神の働きのまゝに描寫されてゐたとき、そのいつはりない感覺の表現は人間本然の姿である。そこに溢るゝ清新味と、惹きつけるやうな眞實味とを御覽なさい。嘗て私は或る幼稚園の一幼兒の粘土塑像の作品に、古代ギリシャの立派な藝術品に讓らぬ藝術的眞味を有するものを見た。その豐かな想像力、鋭い觀察、大膽な表現に私は驚嘆したのであつた。而もこれは、幼兒なればこそなし得た創作であらう。これ等を見ても、いかに後天的の經驗や習慣や理智等が、我等の藝術創作の上に累を及ぼしてゐるかを、はつきり教へられるのである。

更に進めて社會的に之を眺むる時は、我等は兒童の作品を通じて、彼等兒童の中に取り入れられた社會性と、我等

大人の中に取り入れられた社會性との相違を對比せしめる時、我等は環境に對する、われらの正しい批判が確立することにもなるであらう。貴族、資産階級の兒童乃至特種區域の兒童との作品を對比若くは細民階級の兒童との作品を對比する時は、階級が及ぼす藝術精神の發動狀態の差違が見られる。都會の兒童と地方の兒童との作品を對比しては、文化の差違による藝術の傾向が見られると共に、鄉土藝術の萠芽現象が窺ひ知られる。又、親の職業によつて比較する時は、親の職業心理が兒童の心の上に與へられたる影響を知ることが出來る。

茲に我等曠原社が兒童彫塑展覽會を開くことになつたのも如述の意味からみて非常に有意義な事であると思ふ。我等は此際先づ東京市内の小學校の兒童の作品よりはじめ、逐次全國に向け、なるべく回數多く、定期的に、而も永續的に展覽會を開催して、兒童藝術教育の爲に陰に陽に盡力する覺悟である。尙、適時には對校的作品展覽會を開き、優秀な作品に對しては、感賞の意を表する計畫もなつてゐる。

新しく茲に喋々するまでもなく、人間の精神及び生活は、文化の進展に伴つて、益々立體化されていく事は明らかな事である。從つて藝術も亦、漸次平面より立體的に進歩することは、人間の藝術に對する鑑識眼が高まり、理解力が強くなるにつれて、當然來るべき現象であらう。

こゝまで來た時に、ふと振り反つて、現在我國小學校兒童の藝術教育の資料として彫塑が如何に取扱はれてゐるかといふことに氣がついた時、我等は失望せずにはいられない。自由畫教育には相當に眼覺めた教育をしてゐるに拘らず、彫塑の方はてんで省みられてない有樣である。現在のやうに、一塊の粘土を兒童に與へ、教師は自己の經驗を小手先に働かせて、林檎は斯くあるべきもの、茶碗は斯くの如きものといふ風に藝術を理窟から教へることが藝術教育の上に何の交渉があらう。その作品は生命を失ひ、兒童らしさの新鮮味を逸した、藝術的價値を減殺した、實に干枯びたいやなものになる。勿論彫塑藝術は繪畫藝術よりも、立體的であるだけによけいに創作の上にも骨が折れ、鑑識にも難であるけれども、繪畫よりも更に深刻なる藝術眞味

を有するものであるが、一方、それだけ創作に趣味もあり、藝術精神の保育に資するところも蓋し大きいと思ふのである。

そこで我等は、この運動に關して、學校當事者の熱心なる贊助を願ひ、現在の單なる手工として取扱つてゐるものを、價値ある藝術的創造のレベルにまで引上げる努力をしなければならない。これにはどうしても、先づ第一に直接兒童の教育に當る擔當者の頭腦に藝術に對する理解、咀嚼が必要であらう。我等は近く開催するこの兒童彫塑展覽會には、學校當事者一般父兄の方、特に各小學校擔當者の來覽を切望して止まないのである。近き夏季休暇には兒童と彫塑藝術に關する講習會を開く計畫もなつてゐるが、それに就てはいづれ通知を發するでしやう。こもあれ彫塑藝術に對して、當の兒童諸君はもとより、擔當教師、父兄みなさまが、これは自分達の仕事であるといふ自覺の下に、同情と誠意をもたれるやう、希望するのである。（文責在記者）

曠原社の兒童彫塑展覽會は來る七月六日から五日間、上野竹の臺美術協會で開催されます。豫定は今秋であつたそうですが、この新運動の聲が世に投ぜられるや、非常な反響を齎し、それがため秋まで待つことが出來ぬやうな羽目になつたのだそうです。（記者）

私の子供の繪

―兒童畫發達の實際研究―

東京女子高等師範學校助教授　山形寛

一　はしがき

小學校に於ける圖畫教育の建設をするには、どうしても學齡以前に於ける幼兒の圖畫的表現生活の實際を研究せねばならん。兒童が尋常一年に初めて入學して來た時に、既に彼等は一角の描寫生活をして來て居る。一度も描寫したことの經驗のないものは一人も無い。之等の事實を無視し彼等の經驗を基礎としないで圖畫教育し方法を建設しやうとすることは實に心なき業と云はねばならん。かう云ふ事は又幼稚園に於ける圖畫に就ても云ひ得ると思ふ。幼稚園にはいつてくる迄にも既に彼等は相當の描寫生活を營んで來て居る。故に幼稚園の教育に於ても彼等の描寫が如何なる心理的の過程を經て來るものであるか、如何なる過程を取つて筋肉運動の統制が行はれて來るものであるか等に關する觀察研究をすることは極めて重要なる事に屬するものである。以上の如き研究はこれ迄にも多くの心理學者や實際教育を擔當する者によつて成されて來たことではあるが然しまだ甚だ不充分であると云はねばならん。而してその研究の報告されたものに就て見ても多くは抽象論に終つて居て、ほんたうにその過程を詳細に記錄したものはない。實際家が參考としやうとするにはそんな抽象論は殆ど役に立たぬものである。吾々の要求する處は一人一人の子供に就いて極めて詳細にその發達過程を記錄したものでなければあまり參考にならない。而してかう云ふ材料が單に一人

や二人のみでは總てを推す材料にはならないけれども、こんなものが數多く出來れば、必ずやそこに子供の發達過程には色々な型がありそれ等が如何なる發展の徑路をとるものであるかと云ふことに就て的確なる指針を得ることが出來やうと思ふ。私は切に幼稚園の先生方にかう云ふ詳細なる研究記錄の發表あらんことを望むものである。

そこで私は如上の意味に於て先づ手近に居る私の小供に就いて彼等の描寫生活を觀察しその材料も多少集めて居る。然しそれは只雜然と集めただけで未だいささかの整理もやつて居なければ記錄等もぬけ勝ちになつて甚だ不完全なものであるから、まとめを發表するの運びにはいたつてゐなく又初めから發表すると云ふ風な計畫を立てて居つたのではないから述べる所はやはり抽象的なものとなつて了つて參考にはならないかと思ふが只同志の方を得てこの研究を完成して行きたい希望からこの稿をかいたのである。

二　描寫は何時頃から始めたか

私には二人の子供があつて長女が數へ年六歳次女が三歳であるが、彼等が何時頃から描寫を初めたかに就ては長女の時と次女の時とで餘程異つて居る。それは長女の時はとばで描寫をして居るものも無かつたし又私も積極的に描寫の機會を與へることをしなかつたために約四ヶ月位長女の方が遲く描寫を初め滿二歳頃であつたが次女の方はそばに姉のかいて居るのを見て模倣もしたし又私も材料を與へて描寫の機會を早く與へたためか滿一歳八ヶ月頃（今から一ヶ月前）からであつた。然し之は凡の所を示したもので、ほんたうは何時から初めたかは頗る不明瞭であつて、インク瓶をひつくりかへしてそのインクを指の先きにつけてそこいら一面に塗たくりまはしたり、火鉢にあつた木炭の屑を捨つてそこいらに塗つたりした事は今少し早くから始まつて居つたやうであるが先づ描寫と名のつけられさうなのは前記の時期位からである。然しどの程度のものからを描寫と云ふかは解譯の仕樣によつて異なると思ふから前記の時期は嚴密ではないのである。

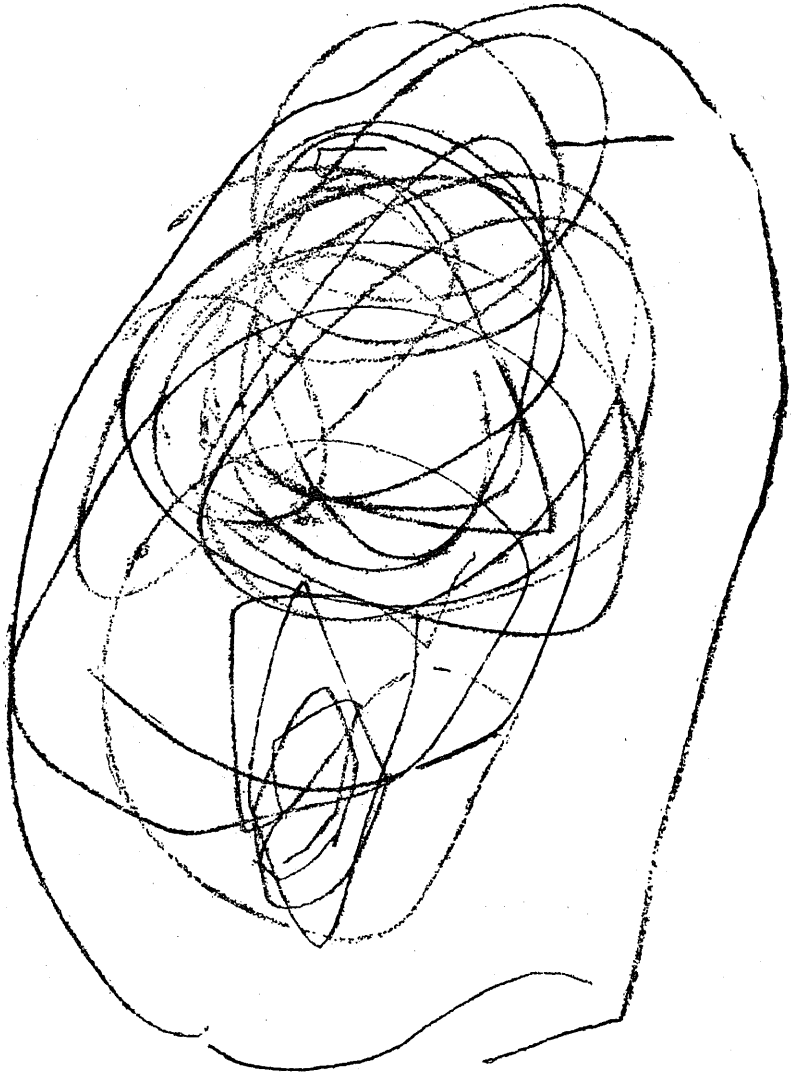
此の滿二歳前後に於ける最初の描寫の特質とも云ふべきは、只塗ることそれ自身に興味があつてするのみで無意味

な漫筆に過ぎない。恰もやつと歩行の出來るやうになつた幼兒が何の意味もなく（子供自身には何等かの意味を含んで居るのかもしれんが）只室内をあちらに行つたり、こちらに行つたりして、歩るくことそれ自身に興味がありそれ自身が生活であるが如く、只畫くことそれ自身に興味がありそれ自身が生活であるのである。そして紙の上に畫くのも疊の上に畫くのも壁にかくのも同じ意味で、畫かけるものならば品物を選ばないやうである。ずい分疊の上にクレイヨンをぬたくりまはされて閉口したり大切な書物の上に畫かれて閉口したりすることがあるが子供は一向平氣で何にでもかきそしてまだ紙にかきたいと云ふ樣な要求もないやうである。そして又紙にかせても必ずしも紙の中に納まる樣には書かず紙の外までも塗つて平氣で居る。之は紙の中に納めやうとしても筋肉運動の統制が出來ないためにはみ出すのか、又納めやうとする意志がないのかさへも初めの中は不明である。

斯かる漫筆を算することを彼等が發見してからは、鉛筆かクレイヨンかを與へ紙を與へれば、よく厭きないものだと思ふ程盛んにかき時には十分も二十分も休まずに續けて居ることすらある。私は之は安價でよい玩具が出來たと思つて彼が他の遊びにあきた時には紙と鉛筆とを與へることにした。そして一ケ月もたてば餘程上達して兎に角紙の外へはあまりはみ出さぬやうになつた。然し相變らず疊の上にでも壁にでも平氣でかくことは元の通りである。上述の如く描寫することは非常に喜んでやるけれども材料を何も與へて置かない時に彼が積極的に材料を要求するやうになるのはもつと先へ行つてからである。次女は今丁度かう云ふ時期にあるのである。そこで私は思ふ斯かる時期に於てなるべく多くの材料を小供の周圍に提供して、彼等をして思ふさま描かせると云ふことは彼等の生活内容　實の一方面をなすものであるから父たり母たるものは材料を潤澤に供給して、その機會を與へることに努めなければならんのである。

三　滿三年前後に於ける描寫

これから後は長女のみに就ての記錄であるが、滿二年頃



「顔」二年八ヶ月頃ノ作(上方ニアルニ本ノ横線ハ眼下ノグルグル畫イタノハ口)

から初めた彼の漫筆は、二年四ヶ月頃からそれに漸次意味づけられる樣になつた。その現はされたるものは相變らず形を成さないものなるにかかはらず之は何であるとかあれは何んであるとか自分だけではそれに意味をつけて畫くやうになつたこんな狀態は可なり長く續いた。然しその畫かれた漫筆に意味づけると云ふことも。ほんたうに或る物を畫かうとして、技巧が拙なため、或は表現法を知らないために、出來たものが、漫筆樣のものになるのか、或は只ぐぢや〳〵畫いたものに、よい自な名稱をつけるのか甚だ不明である。その頃に「お父さんを畫いてごらんなさい」など云つた場合に線を一二本引いただけで「之がお父さんだよ」など云つたり、又始めに之は何々であるなど云つて居つたものを指して「之がお父さんだよ」など云つたりして、お父さんをかくとか山をかくとか花をかくとか口では云つて居るけれどほんたうには何々を畫くと云ふことの意味が解つて居なかつた樣である。

以上の樣な狀態にあつたものが滿三歲頃になつた時には、何々を畫かうと云ふ意志で描寫をするやうになつた。

そして確に何々を畫くと云ふ意味が解つて來て私が見ても凡それらしい形を表現し得る樣になつた最初の物は階段である。此頃丁度階段に獨りで自由に上つたり下りたりすることが出來るやうになり、それが面白くて獨りでよく上つたり下りたりして遊んで居つたものであるが、その印象が深かつたと見え、長い線を二本併べて畫き、その線と線との間に短い何本もの線をかいて「之はだん〳〵よ」と云つて得意になつて示したものである。然し初めは階段だけは大方それらしいものが畫けたにかかはらず其他のものは相變らずの漫筆であつた。其頃又彼は便所へ一人で行くやうになつた。そして便所と云ふものは二つの物がならんで居つてそれをまたぐものであるとの觀念が强かつたと見えて何んでも二つ對立して居るものが畫いてあるものを見ては「之はお便所」など云つて居つたものである。その頃私が海の中に二つの島が對立して居る繪を畫いて來た時に「ここはお便所」と云つて笑はせられたことがある。かう云ふことが又彼の描寫の上に現はれた、圓を二つ併べて畫いたり、線を二本併べて畫いたりして之はお便所であると云つ

た。こんな風にして漸次その印象の深かつたものからその觀念を發表する樣になつた、然し無意味な漫筆はやはりその間に多く行はれて居つた、何をかくと云ふ意志もなく只ぐる〳〵ぬたくりまはすだけのことでも餘程面白いと見える。

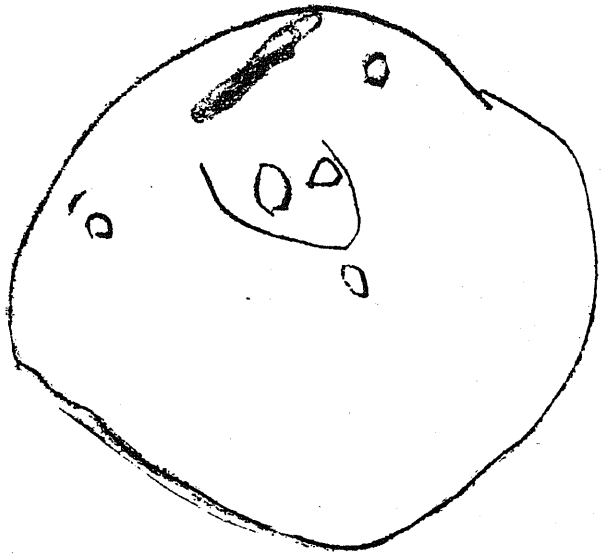
滿三年になる前後から多くの繪本も彼に與へた。之を見ることも大變喜こんでやつた。然しまだ少しも繪本を模寫しやうとする樣なことはしない。

四　滿四年前後に於げる描寫

此頃になつても、やはり相變らずの漫筆は止めない。然しだん〳〵それらしい形のものを畫くやうにはなつて來た。そして此頃から彼の遊び全體の上にも、畫くことにも餘程リズムのあることが明瞭に認められるやうになつた、そしてどうかすると一ケ月位少しも描寫しやうとしない樣なこともある。その時には何か他に非常に興味をひく遊びがある時である。或る時なごは鋏で紙を切ることばかりを一ケ月餘りも續けたこともある。或る時なごは鉢植の草花を出したり入れたり、水をやつたり、いぢつたりすることに興味を引いて數週間も續けたこともあると云ふ樣に遊ぶ事柄に對するリズムが明瞭は認められる樣になつた。又同じく描寫をするにしても、描寫する事柄にリズムがある。或時は人ばかりかいたり、木ばかり畫いたり電燈ばかり畫いたりと云ふ樣に一種のリズムがあることを認められる。

此頃彼の畫いた繪の中に妹を畫たものが數多くある。それ等は皆同じ形式のもので、どれもこれも無雜作に丸をかいた中に眼、鼻、口と認むべきものが凡その位置に畫いてあり、そして必ず顏の左右の兩瑞に縱にまつ黑く非常にこく塗りつぶした所がある。私はその繪を見てそれが何の意味か解らなかつたから「之は何か」と聞いて見たそしたら彼は之は耳だと言つた、然し私はなぜ耳をこんな風にかくのかと云ふことに就て非常に不思議に思つて居つた、そして其後彼が又同じものを畫くのを見た時に始めてそれが何であるかが解つた、それはかうなんである。彼は顏をかく時に前に云つた如く丸をかき眼、鼻、口、をかきそして丸の左右に耳の形を不完全ではあるが畫きそへる。然る後にそ

「お父さん」滿四年頃ノ作



の畫いた耳の上を更にまつ黑く塗つりぶすのである。そこで私は又「なぜ耳をけすのか」と聞いた時に彼は、「耳の上に髪の毛がたれて見えない樣になつて居るでせう」と答へた。成る程妹の耳はおかつぱさんに下げた毛のために大部分かくれて居るのであつた。私は之を聞いてはつと思つた。子供の繪を見て之はちがつて居るの、變であるのなどこうつかり云へないことを今更の如く感ぜしめられた。彼にとつては耳の上に毛がたれてかくれて居るのだと云ふ思想が充分に表現出來て居るのである。耳を一度畫いてからその上を塗りつぶす所に非常に面白い意味が含まれて居ると思ふ。之は單に一例に過ぎないが、子供の繪を觀察して居る時には非常に多くかゝる事實を發見することが出來るのである。

又滿四年前後に彼が畫いた人の顏の繪が澤山あるが、何れも眼鼻口等を顏の上の方に畫いてある。そして鼻には必ず二個の孔を大きく畫いてあつて下から見上げた感じの出て居るものが多いが、之は子供は丈がひくいから大人の顏を見る時には常に見上げて居る譯であるから、そのために斯くの如く畫くのであるかもしれん。然し之は前述のやうな理由でそうするのか、或は技工の拙なためにさうなるのかは不明であるけれども鼻の孔に注意をして居る所などは

「妹」滿五年頃ノ作

確に見上げて居る爲だらうと思ふ。

五　滿五年頃に於ける描寫

四年五ヶ月頃から彼の表現の形式が非常に度々變化し且つ進歩の跡の比較的いちじゆるしいものあるを認める。今迄人を畫くに單に顏だけを畫いて居つたものが首や胴をつけたり四肢をつけたりする樣になつた。然し不思議な事には、よく之迄の書物や何かに子供の表現形式として顏から直ちに手脚の出て居るやうなものを載せてあつたが私の子供は手脚よりも胴の方を先きに畫いた、而して手脚を畫くやうになつたのは滿五年になつた時頃からである。

色彩に關して彼が多少の注意をし

出したのは滿五年前後からである。それ以前に於ても黑色のクレイヨンよりも色のクレイヨンで畫く方を喜んでは居つたが、然しその色は決して色として使つては居なかつた、然るに彼が丁度滿五年になつた今年の五月に、紙の下端を黑いクレイヨンで端から端まで塗り、紙の上端に赤と青と綠とのクレイヨンを互に交錯させ乍ら塗つてあるもの畫いた。そして彼は上方の色を指して「之は夕やけこやけ」と云ひ、下方の黑色を指して「みち」だと云つて居つた。又彼は紙の下方を左右の端から端まで塗つてみちを表はしそれに直角にやはり黑いクレイヨンで樹木をかき數本の枝を畫き枝の先きに綠のクレイヨンでごちや〳〵と葉をつけて置くものを畫いりしたた。之等は確に自然の色彩と云ふものに注意しはじめた證據である。然し自然の色らしきものをにほはせたのは、單にそれ等の數葉に止まり、まだ他の多くは一色でかいて居る。

滿四年頃迄は彼は紙やクレイヨンを自ら要求する場合は少なかつたが此頃はしきりにそれを要求する樣になつた。此頃でも彼に繪本を多少與へて置き、之を見ることを樂しむけれどまだその影響らしいものは現はれてゐない、見ると云ふ生活と、畫くと云ふ生活とはまだ別々のやうである。そして私はなるべく繪本からの影響を受けさせたくないと思つてゐる、自然から得た印象、自然から得た觀念を發表する樣になれかしと思つてゐる。

六　餘　言

以上述べた所は、ほんの飛び飛びに、彼の描寫生活の一端を擧げたに過ぎないから、これだけでは何を書いたのか譯の解らないものになつたかもしれんが、之れを通觀するに、出生より滿二年頃迄は描寫と認むべきやうなことは殆ごしない時期であり。滿二年頃から滿四年半頃までは描寫生活の入門で、その間に於ても前後によつて非常な差異はあるけれども大體一時期と見ることが出來る。四年半頃から五年一ヶ月になる今日までは一變轉期に望んで居るやうに見える。（大正十二年六月十日記）

石鹼玉遊びの玩具いろ〳〵

東京女子高等師範學校講師　藤　五代策

子供の遊び方には樣々ありますが、中にも、しやぼん玉を吹いて遊ぶことなどは、最も無邪氣で、活動的で、安全な遊びてございます、次には私の考案した「しやぼん」玉遊びの玩具三四の作り方をお話し申上げませう。

一　しやぼん液の作り方

水道の水又は雨水（礦物質を含んだ水は宜敷しくありません）を綺麗な皿に少許を入れ、普通の石鹼を皿の底に當てゴシ〳〵擦りおろしますと、だん〳〵粘い液になります、若しリスリン一滴を滴らし込みますと、一層粘り强くなります、（熱いお湯で急に溶いた液はよく使用されません）かうして作つた液には、埃の這らぬやうに蓋をするのです。

二　頭大の石鹼玉の出來る玩具

西洋糸卷心の一方の孔に、古筆の軸を刺し込んで、他の孔を初め作つた「しやぼん」液の中に浸して引き上げ、風の吹かない處で、筆軸を喰へて徐々に吹きますと、だん〳〵大い「しやぼん」玉になります、そして、六七回も息を繼ぎ代へて吹きますと、遂には直徑七八寸な大い「しやぼん」玉になります、子供は不思議がつて有頂天になつて喜びます、又之を見てゐる大人でも、手を拍つて驚くでせう、若し此の「しやぼん」玉を日光に當てますと「しやぼん」玉の表面には、虹を見たやうな綺麗な縞模樣が映りますので、又ぞろびつくりするでせう。

その縞模樣の映るのは、太陽の光線が、光の干渉作用に

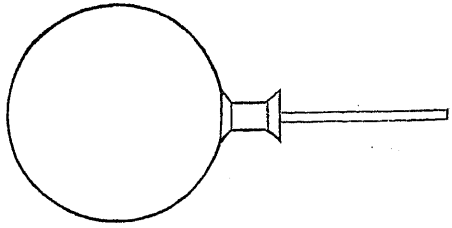
よつて、斯樣な現象を來たすのです。

三　左右に吹き出るしやぼん玉の玩具

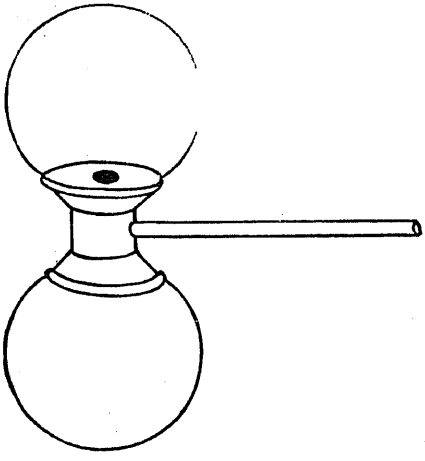
西洋糸卷心の一側面に、錘で孔を穿ち、更に赤く熱した火箸の先を突き貫きますと、直徑三分位の孔が明きますから、其孔に第二圖のやうに、古筆の軸を突き込みますと、丁度でん〳〵太鼓の形になります。

今此の糸卷心の左右の孔に「しやぼん」液を浸して、第一と同樣の方法で徐かに吹きますと、左右に直徑五六寸の大い「しやぼん」玉が出來ます。

第一圖



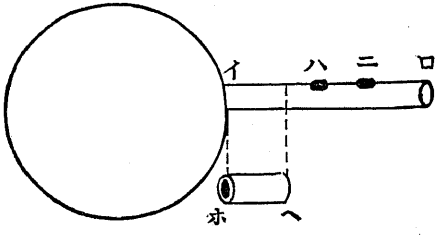
第二圖



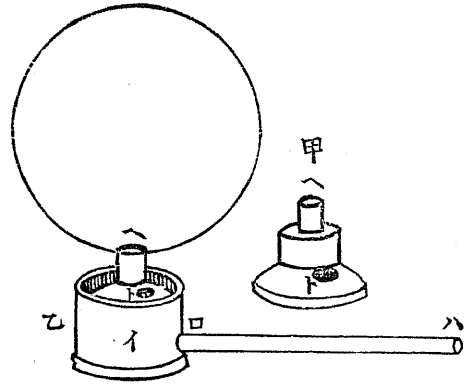
三　便利なしやぼん玉吹き玩具（其一）

直徑三分位の軸を長三寸に切り第三圖（ハ）（ニ）の部に二つの孔を穿ちます。次に石鹸片を直徑三分、長五分位の圓柱に削りて、中に錐孔を穿ちますと、丁度（ホ）（ヘ）の形になりますから、此の圓柱を（イ）（ロ）筆軸の下端内に嵌める

第三圖



第四圖



錐孔を穿ち、(ヘ)に短い管竹を刺したものです。

乙は直徑七八分位、節のある短い竹筒の(ロ)の部に筆軸を嵌め、管内には甲の裝置を嵌めたものです。

今「しやぼん」液を乙の筒内に注ぎ込みますと、(ト)の孔から下に滴ります、此のとき(ハ)を喰へて吹きますと、(ヘ)の管口から大い「しやぼん」玉が吹き出ます、それが、練習がつみますと、「しやぼん」玉は、空へフワリ〳〵と飛んで參ります、此の玩具も筒内に少しでも、「しやぼん」液のある間は幾回でも行ふことが出來ます。

のです、今微温湯中に此の玩具の下端を浸して引き出し、普通の「しやぼん」玉を吹くやうにして吹きますと、大い「しやぼん」玉が出來ます、此の玩具は毎回「しやぼん」液に浸しかへる必要はありませんので至極便利であります。

四　便利なしやぼん玉吹き玩具(其二)

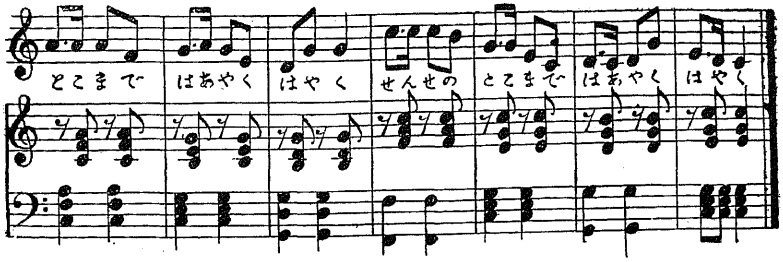
第四圖甲は西洋糸卷心を、二つに切り、(ト)の部に大い

子どもは破壞を好むものである。そして建設を好むものである。

世界の歴史は興亡の歴史である。破壞と建設との歴史である。

だから世界各國の榮枯盛衰は、大人のうちにひそむ童心の發動現象とも見られやう。

K・M



かけくら

用意

一、白勝つやうに
二、赤勝つやうに
三、はあやくはやく

白勝つやうに
赤勝つやうに
はあやくはやく

お旗のとこまで
はあやくはやく

先生のとこまで
はあやくはやく

かげくら

茂木由子作詞
萩原英一作曲

速く

用意　一　二　三

8va

Piano

1

しろかつ

やうに　あかかつ　やうに　はあやく　はやく　しろかつ

II

やうに　あかかつ　やうに　はあやく　はやく　おはたの

萬國幼稚園協會案

幼稚園要目（續き）

第六章　文　學

お話や唄は幼稚園時代の子供にとつて言葉の藝術である。よい文學を鑑賞するといふ事は文化最高の所産の一を樂む事である。文化最高の所産即らそれは人をして靈長たらしむる、ひき上ようとする高度の進步が持ち來した想像と、言語表現とである。

善い文學は普遍的な原理を、すべての時代のすべての人に理解され得る形で、具體化するものである。

一般目的

快を與へる事と、それに依て感賞力を發展せしむる事。想像を鼓舞する事と、言語形式或は劇的表現に依て創造の欲求を喚起する事。

特殊目的

言語表現を自在ならしむる事。

1. 模範的言語を與へて
2. 模範的藝術形式を與へて

活動の方行を指示する事。

——それは子供の心を動かしなほ實際には經驗しなかつた場合まで想像を働かし子供をして劇的に進展させる——高い理想を振興させる事。

1. 滑稽談に依て、——下級の人々は他人に不快を與へてまで異狀の事を喜ふが、滑稽の感念は無害な驚きで、驚かしたり笑はせたりする。
2. 子供の經驗を表すお話を通じて、——子供自身の經驗の中から意味のある事を取り出しそれを强め又話に依てそれを適切に結び合はして示す。
3. 如何に行ふべきかと云ふ基範を與へる道德を目的としたお話に依て、——教訓は詳しく說明してはならな

い、子供自身で解譯し得る樣に十分明白に表示せられるのでなければお話は力の無いものである。

主題

お話の主題は、お話の中の人物の活動に依て强められた處の中に對する態度である、それは聞き手の感情上の反應である。又お話は要目に示された話題に就ての考慮から生ずる氣分に直接關係する、が話題は、あながち要目に示されたものには限らぬ、クリスマスの前の晩のお話はクリスマス當時に話される——文學の形式であたへられる此の經驗の表現であるから——「お婆さんと豚」の話は連續の觀念の表示し、子供がお互に助け合ふといふ樣な活動を爲はじめた時に話されるべきである。

年長の子供達の爲のお話は、童話、英雄談、寓話、滑稽談、フエアリーの話、實話と云ふ樣に分類される、幼稚園時代の子供に聞かせる話の中で初めに擧げた三つの題目に叶ふものは極めて僅少である。簡單な童話として話としてもよいのは「リトル、レッド、ライディング、フウド」である。英雄談と同樣の目的で役に立つのは簡單な良い子供達の實話——「子猫ブシー」や「セドリックはどうして子猫を救たか」の如き——である。よく知られてゐる小數の寓話にのみ、此の時代の子供を興がらせるのに十分明瞭な意味がある、——「野兎と龜」「北風と太陽」「ライオンと廿日鼠」の如き——。

幼稚園に於て話される多くの話は、フエアリーの話、滑稽談、實話の三題目の下に分類される。最もよいフエアリーの話は屢々話される。子供はお話の中の人物の架空自在を認め想像の自由を樂しむ。子供はお話の中の人物を彼の正邪の理想を基礎づける模範としては受け入れない。滑稽談は、平常よく知て居る人が常と異た受け答をしたり、又話手が語調を變へたりするのにその特色がある、しかしその中にわかる樣な、不快な分子を含んではならない。「ジンジア、ブレッド、マン」では立場そのものがユーモアを創造する。なぜならば「私はもう死んでしまつた」と叫ぶのは小人自身であるから。かような話は決して倫理上の意味を傳へるには適しない。それは純ユーモアを意味してゐ

る、日常の生活狀態を對象とするお話に於ては細かい倫理上の入組みがあつてはならぬ、――常に正義を勝たす正邪の爭鬪をしくむ他には――。明かに教訓の爲といふお話はいづれの要目に於ても僅である。お話は又屢々讀で聞かされる。話し手の劇的な所作は子供の注意を惹き又保つ助けにはなるが、或時は子供の注意は、話そのものゝ上に直接集中せられるべきである。その樣な場合にお話は讀まれる。――讀み手の個性は話し手程に强く感じられないから――。面白味の大部分が、其獨特の言ひ方に基く處のお話は、讀む話として選ばれ得る。挿畫のあるお話は、この目的の爲によいものである。殊に「ピーター、ラビット」や「リトル、ブラック、サムボー」の如きは、よい。

言語の選擇

話し方に用ひられる言語は、お話の題目に適合したものでなければならない。寓話は簡明な言語で、フエアリーの話は美しい流暢な言話で表はさるべきである。幼稚園時代の子供にとつては話の行動は早くあるべきである。詳細な記述的說明はされるべきではないから。此の時代には律動的語句の反復が大層喜ばれる。

世界文學のお話は、子供に理解される程度にまで單純化されてはならない、美しく又力强い、かげに含まれた意味を略して其の眞價を低く下げるよりも、其の主題に適合して形式で與へる思想を、子供が感賞し得る時代になるまで待つ方がよい。後になれば完全な形式で感賞され得るものを、効力の弱い譯意で與へるといふ事は不必要である。そして子供の各時期によく適したよいお話はその他にある時には「ジ゛グフリード」「キングアーサー」「バセフオネ」「ゴールデンタッチ」は幼稚園の子供に適す樣にされる事もある。

お話の形式

お話には、前置き、葛藤、頂點、終を備へた一定した脚色がある。主な人物は明瞭にそして他は背景となるべきである。小さい子供達は主役人物を對照的に表す脚色の反復をことに喜ぶ。たとへば「リトル、ワンアイ、トウアイス、スリーアイス」の如き。

よい形式の例

或時小さい少女が果物畑の木の下を歩いて居ました。その時丁度頭に下つて居る枝に、まあるい、眞紅なリンゴのなつてゐるのを見ました。

「まあ、どうだ、リンゴさん、私の處へ降りて來て下さいな」

と少女は云ひました。けれどもリンゴは少しも動きませんでした。小鳥が葉かげから飛び立つてリンゴのなつてゐる木の枝にとまりました。

「まあ、どうだ駒鳥さん、リンゴに歌てきかして下さい、そして私の處に來るようにして下さい」

と少女が叫びました。こま鳥は幾度も〳〵歌ひました、けれどもリンゴは動きませんでした。「私はお日樣に助けて下さるように願てみよう」と少女は思ひました。

「どうだ、お日樣、あの赤いリンゴの上に照りつけて下さい、そして私の處へ來るようにして下さい」

と少女は云ひました。お日樣は盛に照しましたそして紅い頰を兩方とも撫でました。けれどもリンゴは少しも動きませんでした。丁度其時大風が吹き起て來ました。

「まあ、どうだ風さん、あの紅いリンゴを搖つて下さいそして私の處へ來るようにして下さい」

と少女が叫びました。風は右に左にリンゴの木を吹きなぎました。そして紅いリンゴは少女の前かけの中に轉がり落ちました。

廿日鼠と松鷄（ライチウ）と小さい赤い鷄

或日小さい赤い鷄が食物を拾ひ歩いてゐました。そして一粒の小麥を見つけました。「おや、こゝを御覽こゝを御覽！私は小麥を見つけた、誰か粉ひき小屋へ挽いてもらひに行つてくれるだらう？そうすればお菓子がたべられるのだがナ」と鷄が云ひました。

「誰がこれを粉挽小屋に持て行くか」

「私ぢやない」と廿日鼠が云つた。

「私ぢやない」と松鷄が云つた。

「そんなら私が自分で行かう」

と、小さい赤い鷄が云つた。

「誰が粉を家へ持て行くか」

「私ぢやない」と廿日鼠が云つた。

「私ぢやない」と松鷄が云つた。

「そんなら私が自分で爲よう」

と、小さい赤い鷄が云つた。

「誰がお菓子を作るか」

「私ぢやない」と廿日鼠が云つた。

「私ぢやない」と松鷄が云つた。

「そんなら私が自分で作る」

と、小さい赤い鷄が云つた。

「誰が此のお菓子を燒くか」
「私ぢやない」と廿日鼠が云つた。
「私ぢやない」と松鷄が云つた。
「そんなら私が自分でする」
と、小さい赤い鷄が云つた。

「誰がお菓子を食るか」
「私が」と廿日鼠が云つた。
「私が」と松鷄が云つた。
「それは私が食べませう」
と、小さい赤い鷄が云つた。

方　法

家庭教育は、新入學兒童の學校で初めて話されるお話の種類を定める。教養ある家庭から來る子供達は、どんな長さのお話でも聞くが、初めて話されるものが、かつて幼稚園の先生から聞たものであるならば聞く力は益增進さるゝに違ひない。「マザー、グース」は短くて、明瞭で、黑板畫や、繪や身振を使て話す事の出來るお話で、手初めのお話としては大層善いものである。

お話の數は、子供の進歩の如何による。原則として或るお話は毎日される。よく知られて大層好かれてゐる。「最上文學」の話は、教師が其の一字の位置を違へても、子供がそれを正し得るまで練り返される。お話は斯樣な方法で、十分受け入れられ、想像と表現の子供の肝要な生活の部分を成す。

子供達は極く簡單なお話を、くりかへして話す樣に又他の話を劇的にする樣に奬勵されるべきである。然しもし子供達が、まだお話を思ひ起す樣になつてゐなかつたら、子供からお話の事柄を無理に引き出すよりも教師自身がも一度話す方がよろしい。

又子供達は、獨創的の話を話す樣に奬勵されるべきである。それらは未熟のものであつても、想像的思考を自在にし、それに言語的表現を與へる力か、練習を重ねるに從て漸次起る。繪の解釋をする事は、子供がお話をする時の創造力を增進する助けになる。次に掲ぐるはミレーの「歩ぎ初め」に就いて四歳の子供がした話である。

『或る處にお父さんとお母さんと赤ちやんが居た。お父さんは終日働いてゐた。やがてお母さんが「お父さんのお歸り」と云つた。お父さんは赤ちやんを抱いて家にはいつてお夕飯をすませた。』

この簡單なお話は、よい文學形式の規定に叶てゐる。お話や唄や詩の爲に子供達は剪り紙の作品を喜んで作る。その作品を本に纏めて家へ持ち歸ると、そこで又子供達は唄やお話を家族の爲にくりかへす。一團の爲のかういふ繪本は團の各自の子供が各自の考を發表し、それに先生が題を書いて作り出す。

話し手の、話し振りはお話の興味に大層關係を及す。聞き手に、話を感じさせようとする人は、お話が、話す價値あるものといふ事を信じ、世の思想の最高最上のものを與へてゐるといふ事と、他の何れの方法によつても與へ得られぬ(これのみの力である)といふ事とを信じなければならぬ。又話し手は、聞き手が話の全價値を得る事の出來るように話す事が出來るといふ事を信じなければならぬ又話さうとする話をよく知らなければならぬ。たゞ言語を記憶するのみでなく明かに目に見えるように爲得るほどに。なぜ話すかといふ事の主部とそれを如何にして力づけて發表しようかといふ事とを知らなければならぬ。又話し手は表情に富んだ語調や顏つき、身振で話すほど自分自身お話に感じ、お話を樂しまなければならない。劇的な話し方は遙かに雄辯法に優るものである。

力弱い話し方。まとまりなく話す話し方。誰も記憶出來ないほどあまり多くの事柄を話す事。味をかみしめる餘地もない程僅かしか話さない事。子供の發達と子供の要求とには關係なく日程の題目へ話を結びつける事。あまり多く日常經驗の事柄をならべる事。年長兒に適切な話をする事。以上の缺點を犯した時、話と話し方とはその全價値を失ふ。

効　果

短いよいお話の感賞、

種々なお話をくりかへし得る能力、(主な出來事を順序正しくならべて)

簡單な想像話を創造する能力。
種々な短いお話を劇的話す能力。

詩と歌

「マザー、グース」の歌は、幼兒にとつての善い詩である。各々が、ある特種な場合に情緒的な反動を惹き起す。「マザー、グース」をよく知らない子供達にはこの歌を與へるとよい。

狀況を記述し或は情緒を表現する、一句、一節、歌と詩とは子供達に、彼等の經驗を語り得る爲に與へられる。之等の長短や難易は子供の發達とその家庭教育によるものである。やゝ長い詩は子供に讀み聞かせるのによく、一節或は、一行が子供の歌から、屢々記憶する爲に選ばれる。

◆ゲーテは言つたことがある。

「子どもがその初期に於けるやうな發達を續けたなら人間はみな天才になれる」

生れてから數年の間は、人間一生中發育の最も旺盛な時期で、身體、知能の兩方面共に著しい進歩を示すのである。

中にはこの發育が一時に來て人を驚かすものがある。世は之を神童と言つて非常に評判するけれども、俗に「十で神童、十五で才子、二十歳過ぐればただの人」といふけれども、ただの人ですめばよいが、かうした子どもは畸形的發育をしだので、概して早熟で、その發育がとまると、或は白痴となつたり、狂人となつたりして、終りを全ふしないものが少くない、幸ひにこの奇蹟的發育が永續する時、その人は天才と言はれて永く世に稱へられるのである。

英國其他諸國に於ける 保育學校の近況

ロンドンに於ける、國會聯合諮問會議は、最近保育學校の報告に關するパンフレット出した。其内容に依れば

必要と經營難

即ち英國保育學校の現狀は、殊に産業中心地に於ては其價値を認められて居るが大多數の學校に於て幼兒一人一人に多くの費用を要する爲其普及は容易でない。その費用經減の爲何等かの方法を施さなければ今後其新設又それに對する國家の補助は不充分であらう。

しかも「1.社會事業2.保護事業3.教育事業」の二目的を成就せんとする保育學校の價値は殊に都市に在て緊急必要を確認せらるゝのである。かの三、四歳の子供のある勞働階級の母親は一、二室の家に住んで居るので幼兒は安全に遊び得る僅かの庭も無く、其上絶えず家内の雜事に追はれ過勞の結果勢ひ母親の不健康、神經衰弱を來し、家庭内の空氣を亂し又他人まで及してゐる。かような狀態にある二才から五才迄の子供を保育學校に收容すれば、母親を助け家庭生活を平和にし得る。第二の大なる効果は幼兒の健康標準を保ち、疾病を未然に發見し治療することで、第三は家庭訓練を受け得ない幼兒に對しての學校教育の準備である。

校　舍

現存の二十校は其の建築はまち〳〵である。が態々建てると云ふ事は經費の上から許されない其大多數は從屬の建築で甘んじなければならない。マンチエスターの Ardwick 保育學校は貧民窟の二の小舍で驚くべき程成功した。實際必要なものは、充分な空氣と日光と、出來得るならば少なくとも庭があればなほ善い。兒童保護病院、畫間保育學校と保育學校との接近――時には後二者は同棟でもよい――は、費用節約の一法であり尚且つ幼兒の保護と發達とに欠くべからざる連續を來すであらふ。小規模の學校に比して

各幼兒に付き多くの費用を要する。

職員

職員は在籍兒の數に依る。各學校には有資格教員と巡廻婦を要す、後者は附近の晝間保育學校の保姆でもよい、なほ醫師の定期回診を要し（佛國にては少くも毎月一回定期廻診を爲すべき事を國法に規定して居る）其他には保姆職員の下に働くべき見習生（成るべく中等學校を經た者）である。

もし周圍の社會狀況により、保育學校の必要が擴大せらるゝ場合には、保護委員會の如きものを附屬せしめ其方面の他の兒童を扱ふ總ての機關と協力して、入學兒童の選擇と許可、及其の爲り家庭訪問、これまでの健康狀態調査等の仕事を委任すべきである。保育學校の社會的目的遂行の爲には特志的努力を要す。即ちこの保護委員會の如き助けに依て家庭の同情ある理解を責任に訴ふる處無くば蓋良結果は望まれないであらふ。

國外に於ける制度

米國――では托兒所や晝間保育學校は多いが本來の保育學校なるものは顯著でない。デトロイト及ニューヨークはその實行を試みつゝある。ニューヨークで米國に保育學校を紹介せんとした最初の企は、コロムビアの教員養成所で、英國マンチエター大學の、保育學校主唱者の一人なる Miss Grace Owen を依頼して保育學校教育に關する講義を聞いた事である。デトロイト Merrill Plamer School の校長 Miss White 曰「第一の要件は良教師の採用である。晝間保育學校或は幼兒學校も學齡前の兒童問題を扱ふには不充分である。米國に於て我々は英國に於けるよりも更に營養方面に力を注ぎ。保健殊に食物に關して力を用ひなければ保育學校はその名に價しない」と。

ベルジウム――には Ecoles gardiennes「保護學校」がある。國家はそれに監理者と教師の俸給を補助して居る。これらの俸給には相違があつて一年四千フランから、八千五百フランに亙て居る。更に國家は家具建築の入費の五〇％を附

興し殘餘の費用は市で負擔する。學校の經營と內部組織を定る視察員は地方自治體に依て任命せられ、政府視察員は定期訪問をするが直接監督は地方當局がする。ブルッセルにある二十五個の「保護學校」は勞働者、商人、有產者の三種類に分られ幼兒は三歲より六歲迄、收容時間は午前八時三十分から午後四時まで、晝飯に一時間半を割く。尙その多くは二歲から三歲の子を收容する Pouponnieres「嬰兒學校」は四歲から六歲の勞働者の兒童を收容する Gardien-nato が附屬してゐる。

フランス——に於ては三四四一の Ecoles Maternelles があり、其中二六二二は國立他は私立である。之等學校の創立費は普通國家の下附によるがその代り地方自治體は最後三十年間學校を維持しなければならぬ。教師は國家の任命により助手は自治體から支給せらる。文部省に居る四人の婦人視察員が全國の Ecoles Maternelles を管理し直接には地方視察員行政區の派遣員視察醫が事に當る。

イタリー——の Asili infantili「育兒所」は慈善的設備として內務省の支配下にあるが管理は文部省に依り其の多くは市の設立である。

——ロンドン、タイムス——

深川の靈岸小學校は貧しい家の小供が多いので、兎角家庭の問題が多く、何事があつても持つて行き場がないので困つてゐる者が少くないため、椎名校長の發案でこの六月一日から人事相談部を設けて之等の人々の相談にのることになりました。そして

○子供の生れた屆けをしない方
○子供や御家庭が病氣で御困りの方
○御家內がなくなつて葬式が出來なくて御困りの方
○仕事がなくて御困りの方
○その他思案にあまる事のある方は一度學校へ御相談下さい、出來るだけお世話いたします。と言ふ印刷物を作り、區內細民區域に配布しました。それ以來日に二三件の相談があつて、大そうよい成績を擧げてゐます。

お春

東京女子高等師範學校教授　岡田美津

米國作家 Wriggins 女史の Rebecca of the Sunnybrook Farm は、子どもを中心とした小説のうち、最も優れたものゝ一つとして、非常に歡迎せられたものです。岡田教授は其の自在の麗筆を以て、全く我國の讀みものゝ樣に譯して下さいました。本誌はこれから常に、子どもに關係のあるいゝ文學を御紹介して、興味のゝい讀みものを提供したいと思ふのですが、其の第一に、岡田教授を煩はして此の名篇を得たことは、誠に幸のことです。毎號連載しますから、御愛讀を得たいと思ひます。（編者）

一　姉弟七人

古びた乘合馬車　錦ケ森から河崎へ通ずる埃ぽい路をカタコトと進んでゐた。その日は未だ五月半ばであつたが、眞夏程に暑かつた。馭者の幸兵衛爺さんは、馬になるだけ樂をさせて居た……尤自分は郵便物を運搬してゐるンだといふのを忘れては居なかつたが。往く途は山坂が多かつた。幸兵衛は手綱を緩め、だらけた姿勢をして泥除板の上に片足をらく〳〵と伸してゐた。そしてフエルトの古帽子を眼深に被つて左の頰の中で煙草をもぐ〳〵嚙んでゐた。

馬車の中に一人御客がゐた。ペカ〳〵する薄黃色のキャラコの着物を着た女の兒だつた。細つそりした身體に糊のきつい着物と來てゐるので皮蒲團の上でツル〳〵辷つて仕方がなかつた。中央の席の所に兩足を踏張つて木綿の手袋をはめた手を左右に突いて何とかして釣合を取らうとするけれど、馬車が路の凹所へゴトンと入るか、石の上に乘り上げるかすると、その身體が一旦宙に浮いて而してドタンと落ちた。するとその兒は妙な格好の麥藁帽子を後部に押しやつて、桃色の

日傘を拾ひ上げるかその位置を直すかした。その傘といふのが特別この兒の大事なものらしく見えたが、或は南京玉製の財布の方がもつと大切だつたのかもしれない。上つたり下つたりする路で苦しめられながら折さへあれば中を覗いて中身が減りもせず紛失もせぬのを悅んでゐる風だつた。幸兵衞爺さんはこの惱ましい旅の苦をちつとも察しなかつた。爺さんの役目は行先まで客を乘せて行けばいゝんで、途中を樂にしてやるには及ばないのだつたから。實のところ爺さんはちいさなこの心にも止まらない御客が乘つてゐたのを忘れてしまつてゐた。

その朝錦ヶ森の郵便局から爺さんが出掛やうとしたら女が一人荷馬車から降りて爺さんの傍へ來て、河崎行きの乘合かときいたり、幸兵衞さんといふのは御前さんかと尋ねたりした。さうだといつたら、その女は返事を待ちかまへてゐた女の兒の方に合點いて見せた。するとその兒が遲れてはならないといふ風で走りよつて來た。十か十一位でもあらうか、何しろ年齡よりは小さく見える子だつた。母親はその子を馬車に手傳つて乘せてやり、その傍へ風呂敷包と紫はしどいの花束を置いてやつて、それから古鞄を馬車の後へ括りつけるのを指圖し最後に大事さうに銀貨を數へ〳〵馬車賃を拂つた。

「河崎の私の姉の所へこの子を屆けて御もらひ申したいんです。田中よねといふのとミネといふのを御存じですか。煉瓦の家に住まつてますが……」

「あゝ知つてるどこぢやねい、大知りだ」

「そこの家へこの子は行くんでね、先方で待つてますよ。こうか氣を付けてやつて下さいまし。お春やさよなら、大人しくして行くのですよ、先方へ着いた時に着物がキチンとなつて居るやうに、馬車の中にチャンと座つて御いで。このおぢさんに御迷惑にならないやうに……この子は少しのぼせてゐるんですよ……昨日畑ヶ谷から汽車で來て、昨夜は親戚に泊まつて、今朝そこから八哩つていひますが、馬車で來たのですからね」

「母さん、さよなら。心配しないでもいゝわ。始めて旅に出るんでもないから」

母親は皮肉にかゝく笑つて、幸兵衛に言譯らしくいつた。

「渡瀬へいつて一晩泊つて來た事があるんですよ、自慢になる程の旅でもないのに」

「母さんあれだつて旅行ですよ」と女の兒は大眞面目で、しつこくつゞけた「御辨當を籠につめて家を出て馬車に乘つて、汽車にも乘つて、そして寢衣をもつていつたのですもの」

母はこの旅行の思出話を遮つて、

「そんな事を世間中に言ひふらさなくたつていゝよ」といひながら今となつてあゝだ行儀の仕付けをしやうと思つて小聲で「寢衣だの靴下だのつて口に出すもんぢやないと言つたでせう……そんな事を大きな聲でしかも、男の人の前で」

「解つてゝよ、母さん、だからもう言はない。只ね」……幸兵衛爺さんは此時舌打で馬に合圖をし、手綱をピシャリとさせたので馬が靜に歩き出した。……「只ね、あの……」馬車はいよ〳〵動き始めたのでお春は言ひかけた事を言ひ終らうとして、態々窓から首を出して「寢衣をもつて出れば旅行だといふ事なの」

お春の甲高聲で言つた「寢衣」といふ語が、聞くまいとする母親の耳に入つて來た。母親は馬車が見えなくなるまで見送つて、店の腰掛に預けてあつた荷物を纏め、柱に繋いであつた荷馬車に乘つた。馬の頭を向けかへながら、母親は立ち上つて眼に手をかざして、遠くに見えてゐる埃の雲を娘の影かと見やつて、

「おみねはさぞ手がかゝるだらう。だがお春は御かげでものになるかも知れない」

と獨言をいつた。

この經緯も三十分以前の事で、日は照りつけるし塵埃は立つし、暑さはひどいし、それに富田といふ賑かな町での買物の事が考へたりして、爺さんの鈍い頭はお春に氣を付ける約束なんぞまるで忘れてしまつてゐた。

すると急に馬車のガタ〳〵いふ響や、馬具の軋る音の中に人聲がきこえた。爺さんは蟋蟀か、雨蛙か、それとも小鳥か

知らと思つたが、音のくる方角を聞き定めて頭を回らして見ると、お春の姿が馬車の窓から險呑だと思ふ程に突き出てゐた。長い黑い御下げにした髪が馬車と一所に搖れてゐた。その兒は片手に帽子をもつて片手はその小さな日傘で爺さんを突かうと骨を折つてゐるところだつた。

「ちよいと御願ひがあるんです」とその子が聲をかけた。

幸兵衛は、さつそくに馬を停めた。

「おぢさんの隣席に乘ると、餘計御錢が出るんですか、こゝはツル〳〵辷つてベカ〳〵光つてゐていけないの。馬車が大きすぎるんですもの、私一人であちこちへぶつかつてあざだらけになつてしまふね。そして窓が小さいから物がよく見えないの。私の鞄が後から辷り落ちやしないかと思つてふり回つて見るので、首が折れちまいさうよ。之は母さんの鞄で母さんが大事にしてゐるの。」

爺さんはこの止め度のない話……非難といつた方が適當だらう……が途切れるまで待つてそれから剽輕に、

「來たけりやこゝへ來なせい。おらの傍へ來たつて別に餘計の錢はかゝらねい」

と言ひ〳〵手傳つてその兒を馭者臺に押し上げてやつて、自分の座席に戻つた。

お春は腰を下ろしてから几帳面に着物の腰の邊の皺を伸したり日傘を自分と爺さんとの間の凹みに置いたりした。それから帽子を額から押し上げて、繼ぎのある木綿手袋を脫つて、嬉しさうに、

「この方がよつぽどいゝ。それこそ旅をしてゐるやうだ。やつと旅人になつたわ。中に居た時は卵を抱かせるつて塘へ押込めた牝鷄みたやうだつたの……まだなか〳〵乘るんでせう」

「あゝ、やつと出掛けたばかりだ。二時間の上かゝらあ」と爺さんは快く答へた。

「たつた二時間なの」と歎息をして「そうすると一時半ごろだから、母さんは御安さんとこに居るし、家の子供達はう

ちで御晝食をたべてしまつて花姉さんが、跡片付をしてしまふ時分だ。私御辨當をもつてゐるの。母さんがね御腹を空して、おみね叔母さんここへ行つて、始つから叔母さんに御ぜんの支度なんかさせるのはいけないつて……ずいぶん暑い日ですね」

「さうだね……暑すぎるよ。何故傘をさゝねいんだね。」

するとお春は、その傘の上に一層着物をかぶせるやうに擴げて、

「どうして〳〵。日が照つてる時には、翳ゝないのよ。桃色は色が褪めやすいんですもの。だから私曇つた日曜の時だけ教會へもつてゆくの。どうかすると急に日が出てね、この傘を庇ぶのに大騒ぎをするの。これ私の大事な〳〵ものなのよ、だけど隨分厄介なの」

幸兵衛爺さんの鈍い心に、傍に座つてる子は日頃見馴れ聞き馴れてる普通の子供とは餘程ちがつてゐるといふ事が、やつと解りかけて來た。爺さんは鞭を鞭挿しにはさんで、泥除板から足を引込め、帽子を後ろへ押上げしやぶつてゐた烟草を路に吐き捨てゝ、始めてお春をよく視た。見られてお春も親しさうにまた珍らしさうに眞顏で爺さんを見返した。

薄黄色のキャラコの着物は、色が褪めてゐたが、どこまでも小ざつぱりしてゐて糊で硬ばりきつてゐた。おつ立つた襞衿の中からその兒の細い頭が褐色に痩こけて出てゐた。腰の邊りまで太い三つ組になつて下がつてゐる髪の重みを支へられるか知らと思はれる程にその頭は小さかつた。白麥藁の變てこな眉庇つきの帽子をかぶつてゐたが、それが子供帽としては最近の流行品とも思へるし、また昔の古物をにわか仕立てに、手を入れたものとも考へられた。この兒の顏は赤味がなくて角ばつてゐた。顏の道具は人並の數だけ供はつてゐたのだらうが幸兵衛爺さんの注意は鼻、額、頤などゝいふ處まで移らなかつた。途中「眼」のところで引かゝつて停滯してしまつたのである。お春の眼は薄くほんのりとした眉の下で、二つの星のやうに光つてゐた……ちらと物を見るときの眼差は、一心で、興味をもつてゐて、しかも不滿足氣であつた。じ

つと物を見据ゑる時の服は光輝を放つて神秘的で物でも景色でも人でもの、表面を通り抜けて奥まで看通すやうに思はれた。お春のこの眼を説明する事は誰にも出來なかつた。畑ケ谷村の小學校の先生も牧師樣もやつて見たが駄目であつた。更田舍の赤い納屋だの破れ水車だの橋だのを寫生に來た若い畫家は田舍の風景を棄てゝこの子の顏ばかりを畫いた。ちいさな平凡の顏なのだが、その眼はまだ現はれないこの子の力と識見との暗示を與へてゐるので、誰でもその奥底を覗き込んでそこに見えるものは自分の思想の反影だなと想像したがつた。

幸兵衞爺はこんな抽象的な考へ方を無論しなかつた。その晩婆さんに「その子がおれを見るたんびにごぎまぎしたぜ」といふやうな風に話した。

お春は幸兵衞爺と顏を見合せて、爺の顏をすつかりのみこんでから、

「梅村さんていふ女で、繪を畫く方が此傘を下すつたの、桃色で襞飾が二重になつてるでせう。柄が白くて尖端もさうでせう。象牙なの。柄は疵がついてるの。愛子がね、教會で私が傍見をしてゐるうちに弛めたりしやぶつたりしたの、それからは愛子を以前程に可愛いゝとおもはないわ」

「愛子といふのは妹さんかい」

「え、妹の一人よ」

「何人姉妹だね」

「七人。『姉弟七人』ていふ歌があるでせう。『乙女はすぐに答へぬ。姉弟七人なりと』つていふ。私學校で暗誦するんで覺えたのよ。でも他の生徒つてば、ひどいわ、笑ふんですもの。花姉さんが總領で、私がその次で、それから太助、それからゑみそれから政次それから愛子それからみいちやん」

「なるほど大勢だ！」

「大勢すぎるつて他人がいひますよ」とお春が思ひがけずませた口をきくので、幸兵衛爺さんは「これやまあ」といつて左の頰へ烟草を挿し入れた。

「一同可愛いゝのよ。それや隨分手が掛かつて而して、食べさせるのに御錢がいるけれど」とお春はしやべり續けた「花姉さんと私とは、夜になると赤ん坊を寢かして、朝になると起こしてやつて、それより他に年中何もした事ないの。でも、もう御仕舞になつたから嬉しい。一同成長くなつて、そして抵當の方が片がつくやうになつたらきつといゝわ」

「もう仕舞ひになつたつて？　うん、家を出てしまつたからだな」

「いゝえ、もう果んでしまつたつていふの。家族ではもうすんでしまつたの。母さんがさういふから。母さんはなんでも約束通りになさるのよ。みいちやんが生れてからあとはもう生れないの。みいちやんは三歳よ。父さんが亡くなつた日に生れたのでね。おみね叔母さんは河崎の家へ私でなくて花姉さんを招びたがつたのだけれど、母さんが花姉さんに行かれると困るんです。姉さん　家事の用をするのが私より上手なの。昨夜母さんにね、もし私が留守の間に赤ん坊がもつと生れさうなら、私を直によこしてくれつていつたの。赤ん坊が居ると、花姉さんと私と兩方入用んです、母さんは御飯こしらへと、畠の方とをしなくつちやならないから」

「百姓をして居るのかい。何處だね。先刻馬車に乘つたあの近くかへ」

「近いもんですか。何千里つてあるでせう。汽車で畑ケ谷村から來たんですもの。そして長い事馬車に乘つて、御安さんとこへ着いて泊つたの。それから朝起きて錦ケ森まで隨分長く乘つたわ。そこからこの馬車が出たのですよ。私の村はどこからも遠いんです。小學校と教會は畑ケ谷にあるのたつた二哩位よ。かうしてこゝにおぢさんと腰かけて居ると教會の塔へ登る位素的だわ。私の村の教會の塔へ登つた事があるのよ。人でも牛でも蠅位に見えるつていつたわ。まだ人に行逢はないからいけないけれど、牛にや、すこし失望した。思つた程小さく見えないんですもの。でも(元氣づいて)牛

と並んでゐる時ほど大きくは見えないのね。男兒つて强氣な事をいつでもするものですね。女兒は殘りものみたいな獃な詰らない事ばつかりするんだわ。さう高いとこへも登れないしさう遠くへも行かれないし、夜遲くまで戸外にゐる事も出來ず、早く馳けられず何にも出來やしない。」

幸兵衛爺さんは、手の甲で口のはたを拭いて切なさうに息をした、山の峯から峯へ、ゆつくり息をつぐ暇もなく追ひ立てられてゐるやうな氣持がした。

「御前のうちがまだ判然何處だか解らねいんだ……おら畑ケ谷へ行つた事もあるしもとあの邊に住んでたんだが何ていふ苗字だへ」

「近藤。母さんは近藤あさ。私達子供は近藤花、近藤春、近藤太助、近藤ゑみ、近藤政次、近藤愛子、近藤みね。母さんが子供三人の名をつけて、父さんがまた三人の名をつけたの。でも數が揃はないから、みいちやんには河崎のおみね叔母さんの名を貰つたら宜からうつて父さんと母さんと二人できめたの。何かいゝ事があるかと思つたのですけれど、別にいゝ事もないので、今はみいちやん〳〵て呼んでます。私達はみんな誰かに因んで名がつけてあるのよ。ゑみは林ゑみ子つていふ聲樂家の名愛子は松原愛子つていふ美しい女優の名を取つたのだけれど、母さんはあてはまつてゐないつていふのゑみはまるで調子外れだし愛子は足がギゴちないんです。でも折角父さんがつけた名だからそのまゝにしてゐるの。母さんは私達に父さんの味方にならなくてはいけないつていふの。父さんは何をしても運がわるかつたので、運さへわるくなかつたら、死にもなさらなかつたんでせう。もう家族の事で御話する事ないと思ふわ」

と眞面目な顏してお春は言ひ終へた。

「やれ〳〵。その位で澤山だよ。御前の御つ母が選り盡してしまつたからあさにやたんと名前は殘つて居まいて。御前の記憶のいゝこと。學校でものを習ふにちつとも困る事はあるめい」

「あんまり困らないわ。困るのは、學校へものを教はりに行く靴を買ふ事なの。今穿いてるこれは買ひたてのほやほやなんで、半年もたせなくつちやならないの。母さんは靴を大切に御しつていつでもいふんです。脱いで裸足で歩くより他に大事にしやうがないでせう。だけど河崎ではそんな事は出來ない。おみね叔母さんの耻になるから。叔母さんここへ行けば、ずつと續けて學校へ通つて、而して二年たつたら渡瀬の女學校へ入るの。母さんは、そうすれば私がものになる筈だつていふの。學校を濟ましたら私梅村さんみたいな畫家になるの、まあそうしやうと考へてゐるんです。母さんは先生になれつていふけれど」

「御前のうちはもと堀部つていふ人の地所だつたとこかね」

「いゝえ、近藤の地所つていふの。母さんはさういふの。私は獨りで金流園つていふ名をつけてます。」

「所在さへ分つてゐれば、名なんぞどうでもいゝでねいか」と爺さんが尤らしくいふと。

お春は怨めしさうに、手嚴しくぢつと爺さんを見て

「そんな事いふもんぢやないわ。それぢや世間の人と同じになつてしまふ。物は名でちがひますよ。近藤？の地所つていふとその面かげが眼に浮んで來て？」

「浮んでは來ないな」と爺さんは不安さうに答へる。

「では金流園つていつたら如何いふ氣がして？」

爺さんは、魚が水を離れて砂の上で息苦しがつて居るやうな心持になつた。何としても返事をごまかす術はないと思つた。お春の眼が、まるで探海燈のように爺さんの腦の中を貫いて頭の後部の禿までも觀てゐるやうであつたから。

「近くに小川があるんだろう」と爺さんは怖々言つて見た。

お春は落膽したが、全く匙を投げてもしまはなかつた。爺さんを勵ますやうに、

「あんまり見當ちがひでもない。おぢさんは緩まこいのよ熱がないんですもの。小川はあるけれど普通の小川ぢやないのよ。兩岸に若い樹だの可愛らしい茂みがあつてね、水は淺くてサラ〳〵音をさせてゐるの。水底には白い砂やピカピカする小石が澤山あるの。日が照るとね、水がきつとそれを受けて、一日キラ〳〵光つてゐるわ。おぢさん、御腹が減らないの、私減つたわ。この馬車に乘り遲れるといけないと思つて、今朝御飯が食べられなかつたの」

「ぢや今辨當を食つたらよからう。おらは當田町へ行くまで何も食はねいんだ。あそこで「バイ」に珈琲一杯やるんだ」

「富田町へ行つて見たいわ。渡瀨よりも廣くて立派なんでせう。パリのやう? 梅村さんがパリの事を話して下すつたわ。パリでこの桃色の日傘と南京玉の財布を買つてらしつたのよ。パチンと音がして開くでせう。こん中に二十錢入つてゐるの。之で三月郵便切手や紙やインキを買ふのよ母さんがおみね叔母さんはそんなものを買つて下さるまいつて……私を食べさして衣服を着せて學校へもやつて下さるのだから」

「パリは大きなとこぢやねい」と爺さんはけなすやうに

「この縣のうちで一番詰らねいとこだ。何度も馬車でいつたがね」

お春は、默つて靜に爺さんを非難した。その非難は眼でしたので彼女はちらと爺さんを見てすぐと眼を他へ移したのだが正しく非難の一瞥であつたのだ。彼女は敎へるやうに、

「パリは佛國の首府で船でなくては行かれないんです。地理の本に出てゐるわ。佛國人は陽氣な禮儀正しい國民で、舞踏と薄い酒を好むつて。先生に薄い酒つてどんな御酒ですつて訊ねたら、作りたての林檎酒かジンジャビアの類だらうつて。私目を塞ぐとパリがあり〳〵と見えてよ。美人達が桃色の日傘と、南京玉の財布を持つてね始終面白さうに舞踏してゐると、紳士達が行儀よく舞踏をして、ジンジャビヤを飲んでゐるの。でもおぢさんは、目を明けたまんまでいつでも富田町が見られるのね」と羨ましさうにいふ。

「富田町だつて大きい事はねい」と爺さんは全世界の敎會を經回つて、どれも詰らぬものと定めたといふ風であつた「さ今、おらがこの新聞を鈴木のかみさんの家へ投げ込むから見ておいで」

シユツ！と音を立てゝ新聞紙が狙違はず網戸の前の靴拭の上に落ちた。

「ま、素的だ！」とお春は夢中になつて聲を出した「曲馬團でうちの政次が見たつていふナイフ投げの人みたいね。何軒も〳〵網戸と靴拭のある家が並んでゐて、そして一軒々々へ新聞を投げ込みたいわね」

爺さんは少し自慢の氣味でにこ〳〵して、

「投げ損ひもあるかも知れねいよ……おみね叔母さんがいゝといつたら此夏馬車が空の時、御前を富田町へ連れてつて上げやうな。」

嬉しさがお春の身體に、買たての靴から麥藁帽の上まで、それから黑い御下げのてこまで傳はつた。彼女は爺さんの膝を心を籠めて押しつけて悅びと驚きで咽びさうな聲をして、

「ほんとなの、うそみたいだわ。富田町へ行つて見られるの。何だか仙女が出て來て、何か欲しいものがあるならやるとこ言つてすぐそれを與れたやうだ。おぢさんなんか浦島や、小人島や、化け蛙の御伽話をよんだ事ある？」

爺さんは少し考へてから用心深く、

「いや。どうもそういふのは讀んだ事はねいやうだ。どこでそんなたんと讀みなすつた」

お春は無造作に、

「私澤山讀んだのよ。父さんのや、梅村さんのや學校の先生達のや、日曜學校の圖書室の本なんかを。をぢさんは何の本を讀んだの」

「御前のいふ本は讀まねいがな……でも昔はよんだものさ。今ぢや暦に中外週報に農業新誌位だ……また河のこへ出

たこの山でしまいだ。この頂へ上ると河崎村の煙突が遠くに見える。もう遠くねい。おらも煉瓦の家から半哩位のとこに住んでゐるんだ」

お春は氣掛りらしく手を膝の上でもぢ〳〵させ身體を動かした。そして聞こえぬ位に、

「恐いと思ふ事なんぞあるまいと思つたのに、やつぱり恐いんだわ……すこしはね。だん〳〵近くなつて見ると」

「家へ歸りたいかね」と爺さんは好奇心で訊いて見た。お春は憶せず爺さんにキラツと一瞥をくれて、それから傲然と。

「歸るもんですか。恐いと思つたつて逃げるなんて恥だわ。おみね叔母さんとこへ行くのは暗闇で地下室へ行くやうなものだわ。階段の下に魔だの怪物だの居るかも知れないけれど……でも花姉さんに私話すのよ、豆仙女だの、小人だの可愛いゝものもゐるかも知れないつて……あの渡瀬村のやうに河崎にも大通りがあるの」

「あれを大通りといふんだらうな。御前の叔母さんは大通に住んでゐるんだ。併しな、商店もないし工場もないしな見すぼらしい村だよ。少し氣のきいたものが見たけりや河を越しておらの居る方へ來なけりやならねい」

お春は歎息をして

「ま惜しい事だ。こんな立派な馬に曳かれて高い處に座つて眞實の大通りを乘つていつたらいゝでせうにね。そうすると、村の人達が紫はしどいの花束と鞄は誰人のだらうつて珍らしがるでせうしね。丁度行列で練つて行く美人のやうなのにね。去年の夏曲馬團が畑ヶ谷に來た時、朝の中に村を練つて通つたのよ。母さんが私達をみんな行列に入つていゝつていつたの、みいちやんを乳母車にのせて……午後曲馬の藝を見に行くわけにいかなかつたから。その時ね檻の中に、きれいな馬や動物がゐたわ。そして道化が馬に乘つて。一番終に紅と金の馬車が來て、それを二頭の小馬が曳いてゐたの。その中の天鵞絨の蒲團の上に女の蛇使ひが繻子の着物をきてキラ〳〵玉をつけて座つてゐたのよ。その綺麗な事つていつたらね、おぢさん、その女の顏を見ると胸が一杯になつて身體中ぞつと寒くなるやうなの。おぢさん解るでせう。誰かそんな心持にさせる人に遇つた事あつて」

爺さんは先刻からいろ〳〵の事に出くわしたが、此時程不氣味に感じた事はなかつた。しかし質問の要點を巧みに避けて

「大威張りで堂々と村へ乘り込んだつて差支はあるめいよ。おら鞭を取つて、眞直に構へてとつとと馭してかう。御前は花束を膝に載せてな、紅い傘さしなせい。村の奴等をつたまげさせてくれよう」

お春の顏は嬉しさに光り輝いたが、忽ちに力なくなつて、急いで

「私忘れて居たわ……母さんが中に乘せたのを。叔母さんここへ着く時には、やつぱり母さんは私に中に居させたいのかも知れない。中の方が上品なんでせう跳び下りて着物がまくれ上つたりしないで、戸を明けて淑やかに降りられるわけだから。おぢさん、一寸馬を停めて私に引越させて頂戴な」

爺さんは素直に馬を停めて、興奮してゐるお春を降ろし戸を明けて中へ入れてやつた……花束と桃色の傘をその傍へ置いて。爺さんは言つた。

「面白かつたなす。つかり心安くなつたね。富田町の事は忘れちやいけねいよ」

「大丈夫！　おぢさんもきつとよと」お春は熱心を込めて答へた。

「大丈夫、金の脇差しだ」と爺さんも自分の席に戻りながら誓つた。

乘合馬車が河崎村の大通りの楓の並樹の間をゴトン〳〵と進んでいつた時、窓から眺めて居た村の人は色黑の小さな子供が薄黃キャラコの着物を着てチョコンと後部の席に腰をかけて、大きな花束を片手に强く握り、片手に桃色の日傘をもつてゐるのを見た。その連中に眼のきいてゐるものがあつたら、この馬車が通りを曲つて古びた煉瓦家の横手の庭口に向つた時、キャラコの着物の胸が心臟の烈しい鼓動で高くなつたり低くなつたり、青白い頰に紅味が消えたり現はれたりし、涙の雨がキラ〳〵する黑眼に一杯たまつてゐたのに氣付いた事だらう。

お春の旅は終つた。

岡本の御かみさんが夫に向つて、

「田中の家の方へ馬車がまがつていつた。きつと畑ケ谷から姪つ子が着いたんだろ。田中の家でお朝さんとこへ手紙やつて總領の娘つ子を招んだらしいんだがおあささんが差支ないならお春の方をよこしたいつて言つたといふからあれやお春だよ、うちのお駒に丁度えい友達だ。けれど田中ぢや三月と置くまいよ。一寸見ただけだが色の黑い事〳〵。そして出しやばりらしいわ。なんでも話に、近藤の家の者でどこかの學校で音樂と外國語と敎へてゐたのがスペインの女を嫁に貰たつていふが、連造さんは色の黑い方だつたからね、こんどの子もさうだ。スペイン人の血統だつて時代が經つてしまつてそして女の方の身分がちやんとしてゐれば別に不面目だつて譯もないからね」（以下次號）

雜報

小さい音樂家達の會　大塚の日本高等女學校では、七月十七日、牛込小石川の各小學校から音樂の上手な子どもさんを集めた新しい試みの音樂會を開きます。此のくわだては子どもの情操教育の一つとして、これから毎年ひらくことになつてゐます。

文部省幼稚園講習　七月二十五日より五日間、東京女子高等師範學校にて開催されるさうです。申込期日、手續、會費等に就ては、いづれ詳細官報に發表されます。

夏季兒童生活展覽會　兒童用品研究會主催のこの展覽會は、七月二十三日から八月十日まで、三越樓上にて開催される。遊戯は兒童生活の大部を占むるものであるが、殊に夏季休暇中にあつては、學校、幼稚園等の子どもの生活は萬事に開放されて、殆んど全部が遊戯であるといつても差支あるまい。併しその遊戯の間に自ら兒童の身體及び智情意に圓滿な發達を遂げしめねばならない。それにはいふまでもなく遊戯材料の選擇が必要である。そこで、其の材料、乃ち玩具、運動具をはじめ裝飾品、學用品等、之らの新製品をあつめて、推薦の上世間に擴めたいといふのが主旨である。

○文部省幼稚園講習

期日　七月二十五日より五日間
　　午前八時より十二時迄

會場　東京女子高等師範學校講堂

課目及講師

一、幼稚園輓近の實際問題（八時間）
　　東京女子高師教授　倉橋惣三

一、クレイオン畫の描き方實習
　　東京女子高師教授　山形寛

日本幼稚園協會 會員名簿

東京府

赤司鷹一郎
折笠菊子
細川潤次郎
乘杉嘉壽
中村俊子
豐島英子
竹内黨兵
長澤てる
木場雪子
成志幼稚園
後閑菊野
辰野よし
後藤いそ
渡邊こう
中山茂樹
戸野周次郎
大井秀子
平田靜子
社會教育調査課
雙葉幼稚園
岸邊福雄
東京市圖書館
八木金一郎
小杉郷
土井きぬ
前田澄子
水間くま
森梅子
甲賀ふぢ
崎山刀太郎
石原きく
波佐谷みち
村瀨ダイ
嘉納治五郎
百地たけ
和泉橋慈善病院
弘田長
土川田鶴
橋本はな
社會事業協會
加藤律
佐々木まさみ
山田きよ
近藤茂
宮本貞子
那須柳子
外山不二子
檜山京
波多野貞之助
戸澤錦子
山本かね子
土川五郎
吉富スエ
野口援太郎
大橋圖書館
武藤もそ子
高橋とき
相賀よし
丸山かく
三輪田元道
鈴井こそ
及能いそ子
蟻川久江
坂内益藏
渡邊政子
中谷賢治
大久保介壽
藁谷カツヨ
日本日曜學校協會
山崎達之輔
塚本はま
市立一橋圖書館
澁谷德三郎
松平總子
清水あい
臼井玉喜
牧野義郎
ミスアルウイン
岩崎かつ
馬場ゆき
女子師範學校
今井ツヤ
羽田篤
久米照子
吉田熊次

山下タニ
乙竹岩造
野尻哲
牧野岩野
古川竹二
久間嘉裕
久保田次惠
小向喜美
木村るい(る)
唐澤光德
高島平三郎
雨森釧
太田篤
中川謙二郎
金子まつよ
畑登起
黑田家本邸
杉本まさ
久留島武彦
佐藤はる
久次米テル

川上孝子
古市幸
小西信八
東京聾啞學校
板橋いよ
佐藤恒民
青木醇一
佐久間重代
杉村可宗
日本婦女通信社
井後清
富士川游
栢野あい
河合千代
河内コウ
生井さく
淺岡はま
横田けい
小倉海靜
牛場照子
南鐵之助

田中敬一
鶴田富代
福島みほ
小佐々うね
足立節
永田清一郎
平澤繁太郎
坂口英子
諏訪しま
尾田信忠
尺秀三郎
越智のぶ
東京教育博物館
岩村安子
日本兒童學會
田中香
森安松枝
北田直子
青地寛子
宇佐美敬
淺草家政女學校附屬幼稚園

藤美千代
松本亦太郎
松田ミし
東京盲學校
齋藤しづ子
町田孝
小林とし
須藤松子
廣田シヅ
望月いミ
棚橋源太郎
森田さだ
小栗情枝
心理學教室
河野貞
德永恕
川島みつ
長坂賴幸
稻垣實秀
水谷兵次郎
山脇チヨ

土倉かね
藤遊龜江
東京養育院
寺本美福
豐田鐵三郎
皆川喜代
小林なか
佐藤みさほ
野間トヨ
松本孝次郎
小笠原貞子
私立大日本婦人衛生會事務所
井深ミく
教育學教室
河島きよう
野口しん
菊地チトセ
谷中幼稚園
賀集ちよこ
福田照
神愛幼稚園

淺草會館
和田くら
脇屋直
田中儀三郎
小山くわ
頌榮幼稚園
東橋幼稚園
市川みち
馬上幸太郎
柴内なみ
慈善事業研究會
金岡吉衛
八木澤しげ
櫻楓會託兒所
多田房之輔
湯原元一
福昌寺
澤柳政太郎
谷口さく
田子一民
池賤枝

小澤暢
辛亥救濟會託兒所
鹿島かま
高橋マサ
安田善雄
小森田つく
犬養孝子
小谷國次郎
小橋まさぢ
生田なか
小林ヤソ
田中三郎
中川花代
野口幽香
大岩こと
春日賀陽子
野尻精一
森川つぎ
和田とみ
中西福子
鈴木齋

平塚美代
巖谷季雄
星野樂子
武市郁子
小島巖
安田善五郎
宮地みね
早塚文子
心理學研究會
杉坂ふぢ子
菅原敎造
瀨口カヨ
小川小松
丸山千代
原口たい
坂本節
鈴木千代
寺本照子
加藤貞
智本幼稚園
花藤又吉

小百合幼稚園
金子きた
細野浩三
村山鶴
小關加壽
南高輪幼稚園
石原松枝
奥好義
加藤嶺子
甲島敏惠
赤澤よね
黑田光子
安井哲
木口秀
和田實
千葉ひで
松岡しづ
福田會龜戸町保育所
中野貞子
日田權一
板橋幼稚園

雀部清
岩崎こま子
武市榮子
山寺かよ子
山形三從
東川幼稚園
本間愛
喜多見さき
大瀨甚太郎
市川於敏
大久保幼稚園
落合義子
岡ハル
相馬くに子
實踐女學校附屬幼稚園
井村くに
山口敏子
南枝みつ
西本華子
鳥澤雅
小澤マキ

早川仲二　救世軍社會植民部　協調會館

京都府

西山績　私立和樂園　姫宮うめの
教育學教室　聖三幼稚園　生祥幼稚園
朝倉曉瑞　京極幼稚園　舞鶴幼稚園
鹿城徹三　小笠原貞子　小幡小長
早川クニ　田中末　日影幼稚園

大阪府

金谷マス　大貫ツネ　飯田妙子
米山エン　玉造幼稚園　帝塚山學院幼稚部
桑原ユウ　クック　山村十郎
前田義一　藤田敏子　小山ヒデ
膳まき　池上四郎　日本兒童協會
西尾マサ　渡部ミみ　中村宏
佐藤マス　北大江幼稚園　平尾しづ
雀部顯宜　東基吉　堺第一幼稚園

神奈川縣

石野ツヤ　石山德　富田範
大藤ミサ　坂口けい　田澤よね
山内錦子　紺戸廉平　島守さく

野上俊夫　心理學教室
司馬のぶ　城巽幼稚園
村上幾一　中村直子
平安德義會保育園　羽田文二郎

私立三光幼稚園　桐榮よし子
永井一夫　根岸道
松川よね　小川琴
木村良子
福士末之助
野村きむ
竹村一
堺圖書館

尾形シゲ　土井光子
長町そめ　中村多代
増田しづゑ
私立二葉幼稚園
貝塚尋高小學校
久下ふみゑ
木村芳樹
大塚喜一　鎌倉小兒保育園

兵庫縣

本島藤七郎	私立千歳幼稚園	宇山卯之助	工藤繁子	山崎蝶
王置彌江	鶴見幼稚園	藤澤幼稚園	相馬鈴子	
玉井千代子	山森惣吉	甲南幼稚園	谷本富	山本梅生
井上蝶	今井つな	高田仲子	石津作次郎	豐岡幼稚園
龍野幼稚園	多木有機子	高砂幼稚園	段しげの	八志路幼稚園
飾磨幼稚園	坂田律	町立幼稚園	松原きみ	太田恒子
八幡保育所	松永ミき	平安幼稚園	松尾ふさ	矯修會保育所
深井龍	福田トク	須磨浦尋常小學校附屬幼稚園	神戸幼稚園	神戸市立西野幼稚園
安藤さつ	志賀スエ	佐々木まさゑ	三輪いし	鈴木ふく子
小磯吉人	中村五六	望月くに	兵庫幼稚園	

長崎縣

品川ヒロ	齋藤梅子	佐々木祐俊	笹森敏子	長崎幼稚園
和田耕月	古川ひろ	平戸幼稚園		

新潟縣

新發田幼稚園	村松幼稚園	市立高田幼稚園	南幼稚園	高野美代子
山口くに	倉田みす	梅田きし	鏡淵幼稚園	柏崎幼稚園
和敬孤兒院	新潟保育院			

埼玉縣

岩崎慈堅	櫻井房
	岩槻町保育園

群馬縣

淨運寺　篠崎美津
齋藤鋼造　伊勢崎尋常小學校附屬幼稚園　黑崎辨之助　野村ぎん　前橋幼稚園

千葉縣

眞福寺　淺井よし　佐々木兼　船橋幼稚園　栗原よね
成田幼稚園　海瀨よしゑ　千葉町幼稚園　入江重左衛門　石毛利八

茨城縣

進德幼稚園　聖公會幼稚園　土浦幼稚園　川又銀藏　石岡愛友幼稚園

栃木縣

友愛幼稚園　齋藤太兵衛　渡邊ゆき　古橋平八郎　松下幼稚園
山越忍空　久保きみ　日光電氣精銅所

奈良縣

木村公世　教育會圖書館　森川正雄　槇山榮次　堤末惠
會澤たが枝

三重縣

門脇みゑ　稻垣もと　私立白子幼稚園　第七尋常小學校附設幼稚園　敬愛婦人會
宮崎すゞ　五富利清太郎　松坂幼稚園　巽光枝　尾鷲幼稚園

愛知縣

私立半田幼稚園　岡崎幼稚園　大橋智應　佐治大謙　豐橋關屋幼稚園
高木眞敬　坪内きく　鈴木小冬　私立若松幼稚園　エメボーマン

皇風幼稚園　福間安子

五十君ふみ　第二皇幼稚園

山梨縣

菊地鐘　進藤つる

靜岡縣

町立二俣幼稚園　宮ヶ崎保育園

武内富美榮　立修禪寺幼稚園

宇式かん　奥田三郎

小堆初彦　青木幹太

三島幼稚園　小林禮

滋賀縣

野田よし子　草津幼稚園

彦根幼稚園　日野幼稚園

岐阜縣

福田會幼兒部　高山幼稚園

長野縣

山本芳枝　武野八重

宮城縣

坂しま　青葉女學院

福島縣

二本松幼稚園　若松幼稚園

二葉保育園　名古屋工場

第三幼稚園　横山あさ子

青藍幼稚園

梅花幼稚園　林敏子

篠崎甚太郎　女子師範學校

柴田あや　英和幼稚園

松永希道　袋井幼稚園

國府谷しづ　旭幼稚園

關靜

高松田瀨

私立仙臺幼稚園　伊藤登茂枝

喜多方幼稚園　岡ましづ

三春幼稚園

市立第二幼稚園　伊東幼稚園

町立清水幼稚園

木の花幼稚園

浦野みち

下鄉共濟會

黑瀨艶子

福島高等女學校友會

會津幼稚園　武藤ゆき　淺岡一　須子ミみ　私立郡山幼稚園

私立白河幼稚園　庄司かをり　河井臥龍

岩手縣　佐藤トリ　渡邊幸　ブゼル

青森縣　三上ミき　今きよ　養生幼稚園

山形縣　朝一喜勢　遠藤恒藏　私立莊内婦人會幼稚園　山濱桃井　酒田幼稚園

秋田縣　上宮幼稚園　猪股ミチ　秋田縣教育會　助川茂　奈良みつゑ

福井縣　戸泉隆眞　松山マツノ　福井順化幼稚園　愛國婦人會福井支部幼兒保育所　尾上幼稚園

石川縣　京都小學校附屬幼稚園　佛教幼稚園　長寛子　町立袖ケ江幼稚園　大野信夫　輪島幼稚園

富山縣　松本師　私立幼稚園　永盛すゞ

鳥取縣　諏訪幼稚園

島根縣　杵築幼稚園　白潟幼稚園　師範學校附屬幼稚園　濱田町立幼稚園　岡崎クニエ

今市町立幼稚園

岡山縣

菅田眞佐子　國富友次郎
寺山眞壽子　圓藏院
總社尋常高等小學校附設幼稚園　味野幼稚園
山崎照惠　中桐壽平
横山千代子　私立金先幼稚園
町立玉島幼稚園

廣島縣

大平タカ　村上富子
小尻しゐ　西上勝太郎
瀬尾ヤエ　柴原浦子
從道小學校　私立三原幼稚園
藤井榮　鶴鵜速
藏田トキ

山口縣

私立大畠幼稚園　山口圖書館
私立門司幼稚園　第三幼稚園
岩國保育園

和歌山縣

籔内久子　中村熊吉

折井彌留枝　目黑信夫
佐々哲　弘西幼稚園
二葉幼稚園　松井ミカ
津島敏子　高原寅
伊吹美志　馬場千代乃

無得幼稚園　吉田貞
井原せつ　倉田以登
寺原謙一　緒方ヤスヲ
藤井英雄　佐藤勉
廣島高等女學校附屬幼稚園　明山晃赫

百合本モト　双葉幼稚園
第一下關幼稚園　村岡清

成江秀治　田邊幼稚園

西大寺幼稚園　渡邊唯一郎
古田重　阪井ぬい
益岡花子　八幡初野
竹林始女　濟美學校幼稚園
大下絹江　松下文子

山縣まき
笠間廣

竪谷タメイ

和歌浦幼稚園　和田フサ子
板東厚挾子　伊藤貫一
永井うめ

德島縣

田岡トシ　琴平幼稚園
山下チカ　野島藤太郎
私立天神幼稚園　秋山テイ
十河愛子　田井ソノ
市立宇和島幼稚園
高田ヒデ

香川縣

愛媛縣

松山幼稚園　野口和歌
高原カツ　谷本忍雅
高知市第一幼稚園　竹内よし江
好井智源
田村金彌

高知縣

福岡縣

信和會附屬幼稚園　杉山久
大和國子　長野良
林田不二惠　井原つたゑ
眞田フジノ　福岡縣立圖書館
宮原喜之助
明治第四抗幼稚園
有田喜太郎
久留米圖書館

大分縣

泉都幼稚園　成蹊幼稚園
佐伯幼稚園　黑川よしゑ
龜川幼稚園　川西縫子
杵築幼稚園
田近君子

丹鶴同窓會附屬圖書館
鶴城幼稚園
西幼稚園
玉藻幼稚園
常磐幼稚園
石原淳一
梶原政子
市岡キミ
信和會赤池支部託兒所
細溪春子
丸龜高等女學校校友會圖書部
中央幼稚園
濱崎薫
八幡託兒所
萩野久
日出幼稚園
日出町幼稚園
私立白杵幼稚園
手島辰次

佐賀縣
浮須貞　西唐津幼稚園　佐賀婦人會附屬幼稚園　有田幼稚園　右近ふい

熊本縣
私立人吉幼稚園　内田クメ（舊高島）　白木慶三　五島きく　稅所ジュノ
熊本幼稚園　桑原辰喜　松本ふゆ　金井のぶ　小川婦志
手島コト　星子きく　池田かず　北ヒサ

宮崎縣
延岡幼稚園　木下フユ　共愛幼稚園　大山クニ

鹿兒島縣
廣田とし　私立錦城幼稚園　山元歌　會文社幼稚園　河野正志郎
善隣幼稚園　縣立沖繩圖書館

沖繩縣

北海道
精華幼稚園　北海道炭礦汽船株式會社支店　臼田梅子　藤井鴨七郎　藤原のぶ
私立札幌若葉幼稚園　天鹽教會日曜學校　私立北海道高等女學校　若葉幼稚園　澤井與次郎

小池九一

臺灣
岡田千治　上川路芳子　高木坊超聖　坪井正文　櫻川市子
柏熊方こどもくらぶ　重任節子　四元アヤ子　新宮幼稚園　樋口澤子
榎本磯　公立鹿港幼稚園　永井あい　羽田タキ

樺太

森清子　私立咸興幼稚園　江戸ッ子呉服店

朝鮮

平壤幼稚園　奥田なか　鎭海幼稚園
若見祐道　龜井壽子　大和田光枝
永井つゐ　桑原幸　長野クメオ
深野ヤチヨ　淺田チカ　古川ハマ
仁川記念幼稚園　私立龍山幼稚園　浦水多門

大連

戸簾仆　大連幼稚園　魯元昌　西村朝子
五十嵐清子　池田金子　私立京城幼稚園　私立元山幼稚園
遼陽幼稚園　田中きよ　高武公美　高林ヤスコ
山内ヤスヨ　增田みさ　風當たま　釜山私立幼稚園
江頭ミエ　北川外美　庚子紀念京城幼稚園　光刈幼稚園
新龍山幼稚園　大和田りよう

中華民國

趙之積　陳俶　迫田マツ　國廣節
附屬水月幼稚園　天津幼稚園　早川純　長谷川はつ
宗像タカヨ　上野園生
古田ミネ子　古内富代
吉林居留民會　平井美智

漢口明治尋常高等小學校　葉謙
杉浦シヅエ

米國

仲出川初子　田中伊作　園田テイ　楠本R
佐藤S　島野好平　大久保春子　小倉方太郎
市尾初子　梅森キミ　伊達春　菊地智旭
松原斧吉　大内民惠
旅順幼稚園
山地シズ
營口幼兒連動場
大石橋圖書閲覽場
松田シイ
Isaac Inouye

第七回音樂講習會

日時 八月一日ヨリ七日迄
（但シ宮城、新宿御苑拜觀者ハ八日迄滯在ノコト）

會場 東京市本郷尋常小學校
（電車、本郷區役所前、下車）

唱歌科

八月一日ヨリ七日迄　毎日午前八時ヨリ正午迄

講師

○唱歌發聲、音程（廿時間）　聲樂家　外山國彦君
歌曲（うたひ方）（廿時間）　文學士　小山内薫君
○小兒の遊戯から童劇へ（二時間）　早稲田大學教授文學士　片上伸君
○文藝の倫理的意義（二時間）　醫學士　高峰博君
○の實例による解説
○兒童教育と蓄音機（二時間）　西條八十君
○童謡と兒童教育（二時間）
課外音樂演奏　東京音樂學校奏樂堂に於て
○管絃樂　海軍軍樂隊
○吹奏樂　同　海軍軍樂隊
指揮者　海軍軍長　田中豐明君

外に聲樂・器樂等門家の出演を乞ふ豫定

◉宮城並に新宿御苑拜觀　拜觀希望者は申込の事、學校名を肩書して其旨申出でらるゝこと。

服裝　フロックコート又は白、黑無地立襟洋服、和服の場合は紋附羽織袴、婦人は紋服又は縞服に袴を用ふること。

重音唱歌科

一日ヨリ六日迄　午後一時半ヨリ三時半迄　但内一日は音樂演奏會

講師

○重音唱歌並に基本練習（十時間）　外山國彦君
○募集人員　五十名

作曲科

二日ヨリ七日迄　午後四時半ヨリ六時半迄　但内一日は音樂演奏會

講師

○單音唱歌作曲法（十時間）　東京音樂學校助教授　弘田龍太郎君
○募集人員　實習指導六十名（二組ニ分ツ）

遊戯科

一日ヨリ七日迄　午後二時ヨリ五時半迄　但内一日は音樂演奏會

講師

○動作の基調（二時間）　遊戯法大成講師　久留島武彦君
○童謡踊（十時間）　同　眞島睦美君
○童謡遊戯（七時間）　東京女子高等師範學校囑託　印牧季雄君
○同動遊戯（二時間）　同　土川五郎君

■會費　唱歌科五圓　重音唱歌科五圓　作曲科五圓　遊戯科四圓

■申込　七月二十五日迄に本會に着するやう、縣郡市町村學校氏名（楷書にて明瞭に記載し、振替東京壹六壹壹番初等教育研究會宛）を添へざる申込は一切無効とします。

唱歌科の會費御拂込の上、其通知に科目別を御記入下さい。會費は返戻致しません。

初等教育唱歌研究會

東京市本郷尋常小學校内　電話下谷二五〇〇番　振替東京一六五一一番

編輯室より

六月號紙上に豫告しました通り、私達の久しい懸案とされてゐた擴張の望みがいよ／＼茲に實現されました。今度の擴張に就いては私達同人隨分苦心もし、考案もめぐらしましたが、何しろ發行の期日が非常に早められた爲に、體裁の上にも、內容の上にも、希望、計畫を思ひのまゝに運ぶことが出來なかつたのを殘念に思ひます。然し本號に載つたものはいろ／＼の意味に於て、全くいゝ材料だと、已惚かはしらないが確く信じます。來月號からはもつと記事をくだけて出て、而も有益なものを多くしたいと思ひますが、讀者諸君に於ても、どうか、よきにつけ、あしきにつけ、どし／＼御氣附の點を指摘して、私達に鞭達を加へて下さるやう御願ひ申します。

尙、來月號からは、お子どもさんの教育資料として、みなさんのお子どもさんに關する種々の見聞や經驗をも載せたいと思ひますから何分御投稿下さるやう、切に御願ひ申します。それは一日噺でも笑話でも、何でもかまひません。

幼兒の教育は、後天性の性格を作る上に、いはゞ人生最初の教養に盡すところの問題として、最も重大なる使命を帶びてゐるのですから、私達は一にみなさんの助力を俟つて、益々此の擴張を充實し意義を明らかにしなければなりません。それで、會員が多くなればなる丈け、それ丈け、私達の願ひは達せられ、幼兒の教育の氣勢を高める譯ですから どうかお誘ひ合して、なるべく入會者を多くして戴きたいのです。これも御願ひ申します。

追て會費六ケ月以上御拂込の方は幼稚園協會の會員として、毎月巻末に御芳名御住所を發表します。會員は、全國に催される、幼稚園協會の種々な催しに關する特別な便宜を得られます。

定價表			
冊數	定價	郵稅
一冊	金參拾五錢	金壹錢
六冊(前金)	金貳圓拾錢	不要
十二冊(前金)	金四圓貳拾錢	不要

廣告料		
表紙前附	金七拾圓	一頁以下御斷
表紙裏附	金七拾圓	同
普通面一頁	金四拾五圓	同

御注意

□本誌購讀御希望の方は定價表により振替貯金で御送金下さい(東京四六壹壹壹番教文書院)

□前金切れの節は帶紙に「前金切」と致します

□郵券送金の節は一割增で一錢切手に願ひます

□本誌の一切は教文書院宛御照會下さい

大正十二年六月二十八日納本
大正十二年七月一日發行

第二十三卷第七號

東京女子高等師範學校內日本幼稚園協會
編輯者 倉橋惣三
發行者 越元新吉
東京市京橋區木挽町二ノ十三
印刷者 石上文七郎
東京市京橋區木挽町二ノ十三
印刷所 教文書院印刷部

無斷轉載禁

發行所 教文書院
東京上野公園寬永寺坂下(上根岸八十八)
電話下谷三〇四七・一九五一番
振替東京四六一一一番

東京女子高等師範學校附屬幼稚園保姆 阪内みつ子先生著

子供の遊ばせ方

四六版美本 ―近刊―

子供を遊ばせる

ここは中々難しいが又愉快なものである。

幼兒教育の理論と實際に精通した著者の、子供に對する遊ばせ方の研究書であります。學校でも家庭でも備ふべき良書として御勸めします。

目次

子供を遊ばせるといふ意義
子供を遊ばせるに大切な條件
子供の好む遊びの種類
子供の好む玩具の種類
玩具選定の標準
子供を遊ばせる方法
室内遊び
團體遊び
お話
個人的遊び
室外遊び

以下數十項

發行所 東京上野公園寛永寺坂下 教文書院 電話下谷三〇四七番 振替東京四六一一一番

明治三十四年二月二十八日第三種郵便物認可
第二十三卷第七號（毎月一回一日發行）
大正十二年六月二十八日納本
大正十二年七月一日發行

圖畫教授法の新研究

東京女子高等師範學校教授

矢澤弦月・芳川趙

共著

舊套を脱した新しい圖畫の新研究であり、畫家、研究家、教職員諸氏の好參考書として生れた本書は、現日本畫壇の新傾向に對し、權威ある著者の批評は、我が畫壇に與へたる鋭き觀察と共に、縱横に、多年苦心の興味ある結晶の研究を思はす。

目次の中から

美學概論、藝術學概論、圖畫教授の實際、圖畫の批判。寫生の要諦、山水畫論、花鳥畫論、人物畫論、歷史畫論、佛畫論、水彩畫論、日本美術史、西洋美術史の各項は、美に著者に依つて初めて味ひ得る一大論文である。

□最新刊

四六版總ロクスー製
箱入寫眞版二十餘葉
價金三圓送料十七錢

東京上野公園
寛永寺坂下

振替東京四六一一番
電話谷下三〇七四番

教文書院

定價金三十五錢